

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第259集

野馬窪遺跡群

野馬窪遺跡Ⅶ

長野県佐久市猿久保 野馬窪遺跡Ⅶ発掘調査報告書

2019.2

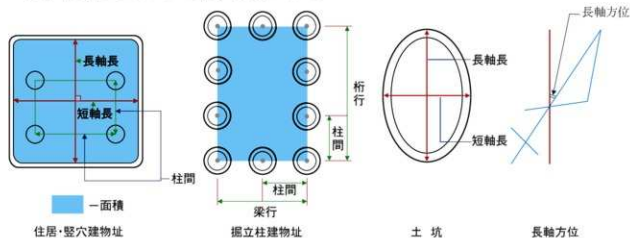
佐久市教育委員会

例言

1. 本書は長野県教育委員会が行う県立武道館建設に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 長野県教育委員会
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 調査地点 佐久市猿久保字野馬窪165番11ほか
5. 遺跡名及び面積 野馬窪遺跡Ⅶ（SNKⅦ） 1543㎡
6. 調査・執筆担当者 富沢一明
7. 本書に掲載した出土遺物については佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡例

1. 遺構の略記号は竪穴住居址-H、土坑-D、溝状遺構-M、ピット-Pである。
2. 挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物で土器・石器 1/4、金属製品 1/2 を基本とする。それ以外のものは挿図中にスケールを記載した。遺物写真は挿図と同一スケールで掲載した。
3. 遺構の海拔標高は遺構ごとに統一し、水準標高をスケール上に「標高」として記した。
4. 土層の色調は1988年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
5. 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。（ ）は推定値、< >は残存値である。
6. 測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
7. 遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。



住居・竪穴建物址

掘立柱建物址

土坑

長軸方位

- ・遺構計測表中の（ ）は推定値、< >は残存値。数値単位はmと㎡であり、その他は表中に記載した。
- ・遺構深度は数値の範囲を示しているもの以外は平均値である。
- ・住居址の形態は長軸長と短軸長の差が1割を超えたものを長方形とした。
- ・住居址の軸は長軸長より計測し、正方形の場合はカマド側を長軸とする。

8. 挿図における網掛けは以下を示す。



目次

例言・凡例

第I章 発掘調査の経緯

- | | |
|-----------|---|
| 第1節 調査の経緯 | 1 |
| 第2節 調査体制 | 2 |
| 第3節 調査日誌 | 2 |

第II章 遺跡の立地と環境

- | | |
|-----------|---|
| 第1節 自然的環境 | 3 |
| 第2節 歴史的環境 | 4 |

第III章 調査の方法

- | | |
|--------------|----|
| 第1節 調査の方法 | 7 |
| 第2節 基本層序 | 13 |
| 第3節 遺構と遺物の概要 | 13 |

第IV章 遺構と遺物

- | | |
|------------|----|
| 第1節 竪穴住居址 | |
| (1) H1号住居址 | 12 |
| (2) H2号住居址 | 14 |
| (3) H3号住居址 | 17 |
| (4) H4号住居址 | 18 |

第2節 土坑

- | | | | | | |
|-------------|----|-------------|----|-------------|----|
| (1) D1号土坑 | 21 | (2) D2号土坑 | 21 | (3) D3号土坑 | 21 |
| (4) D4号土坑 | 21 | (5) D5号土坑 | 21 | (6) D6号土坑 | 22 |
| (7) D7号土坑 | 22 | (8) D8号土坑 | 22 | (9) D9号土坑 | 22 |
| (10) D10号土坑 | 22 | (11) D11号土坑 | 22 | (12) D12号土坑 | 22 |
| (13) D13号土坑 | 22 | (14) D14号土坑 | 22 | (15) D15号土坑 | 22 |
| (16) D16号土坑 | 22 | (17) D17号土坑 | 22 | (18) D18号土坑 | 25 |
| (19) D19号土坑 | 26 | (20) D20号土坑 | 26 | (21) D21号土坑 | 26 |
| (22) D22号土坑 | 26 | (23) D23号土坑 | 26 | (24) D24号土坑 | 26 |
| (25) D25号土坑 | 26 | (26) D26号土坑 | 27 | (27) D27号土坑 | 27 |

第3節 溝状遺構

- | | | | | | |
|-------------|----|-------------|----|-------------|----|
| (1) M1号溝状遺構 | 27 | (2) M2号溝状遺構 | 27 | (3) M3号溝状遺構 | 28 |
|-------------|----|-------------|----|-------------|----|

第4節 単独ピットと遺構外出土遺物

28

第V章 調査のまとめ

36

写真図版 遺構図版・遺物図版



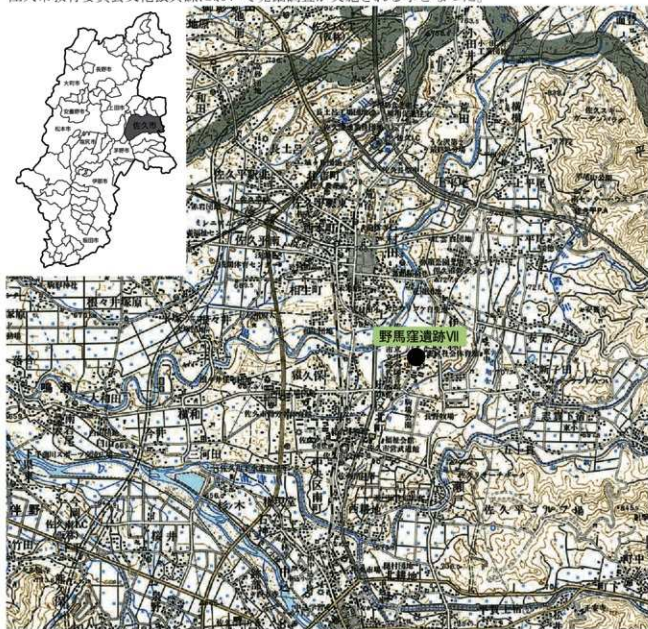
調査区近景（遠方の山々は関東山地）

第I章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

野馬窪遺跡Ⅶは野馬窪遺跡群のほぼ中央に所在し、標高700mを僅かに越える台地西端に位置する。調査地点の地形は北から南へとゆるやかに傾斜する台地で、西側には湯川の河岸段丘が存在する。調査地点周辺は佐久市剣錬センター建設や関連道路建設等で多くの発掘調査がなされている地域である。発見された遺構としては、古墳時代から平安時代の竪穴住居址や中世前期（13～14世紀代）と考えられる方形で二重の溝に囲まれた館跡等が発見されている。

今回、長野県教育委員会により県立武道館建設が計画され、文化財保護法94条が佐久市教育委員会に届け出され、当該地の試掘調査が行われた。結果、建物建設予定地内から遺構が発見され、工事により遺跡に影響が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになり、佐久市教育委員会文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第1図 野馬窪遺跡Ⅶ位置図 (1/50000)

第2節 調査体制

平成30年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤 晴樹				
事務局	社会教育部長	青木 源					
	文化振興課長	小林 義夫					
	企画 幹	武者 新一					
	文化財調査係長	塩川 宏幸					
	文化財調査係	小林 眞寿	富沢 一明	上原 学	久保浩一郎		
		岩下 琴	(平成30年6月まで)		荻原義治	(平成30年7月～)	
		森泉 かよ子	(臨時職員)				

調査担当 富沢一明

調査員	赤羽根篤	赤羽根充江	岩崎重子	橋詰勝子	橋詰信子	堀籠保子
	木内修一	小林妙子	中澤 登	堀籠まゆみ	甘利隆雄	岩松茂年
	柳澤孝子	横尾敏雄	依田好行	小林敏雄	山田叔正	油井満芳
	浅沼勝男	比田井久美子	小幡弘子	羽毛田敏明	堺 益子	

第3節 調査日誌

平成30年

- 3月1日 長野県教育委員会より29教ス第220号により土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知(文化財保護法94条第1項)
- 3月13日 長野県教育委員会教育長より29教文第8-311号にて通知。
- 4月6日 長野県教育委員会スポーツ課と市教育委員会により保護協議が行われる。
- 4月18日 長野県教育委員会より埋蔵文化財発掘調査費の見積もりについての依頼。
- 4月20日 長野県教育委員会と埋蔵文化財調査の委託契約を締結。
- 5月9日 野馬窪遺跡群 野馬窪遺跡Ⅶとして発掘調査開始。
表土除去作業。機材準備。溝状遺構掘り下げ。遺構検出作業。
竪穴住居址・溝跡・土坑検出。遺構掘り下げ。記録写真撮影。
- 6月29日 発掘調査を終了し整理を作業開始。
室内作業開始。遺物洗浄、注記、接合、実測、原稿作成等を順次行う。
- 11月20日 原稿を入稿し、刊行まで順次校正を行う。

平成31年

- 2月12日 埋蔵文化財調査報告書 第259集刊行。
遺物・記録類の取蔵保管を行う。



表土掘削状況



遺構掘り下げ状況

第2節 歴史的環境

今回調査した野馬窪遺跡群が位置する佐久市の北部は、上信越自動車道や長野新幹線等の建設、それらに関連する開発等で1980年代より大規模な発掘調査が相次いだ地域である。それにより膨大な埋蔵文化財資料が蓄積されており、ここでそれらを概観したい。

まず、旧石器・縄文時代であるが、これらの時代は調査面積に比して資料が非常に希薄な時代である。近津遺跡群から縄文後期の土器・石器群は出土しているが住居址は見えていない。また、湯川沿いの寺畑遺跡からは市内で唯一まとまった資料として草創期の瓜形文土器が出土している。縄文期の集落が見えられているのは、関東山地の山裾や千曲川を挟んで蓼科山麓側である。

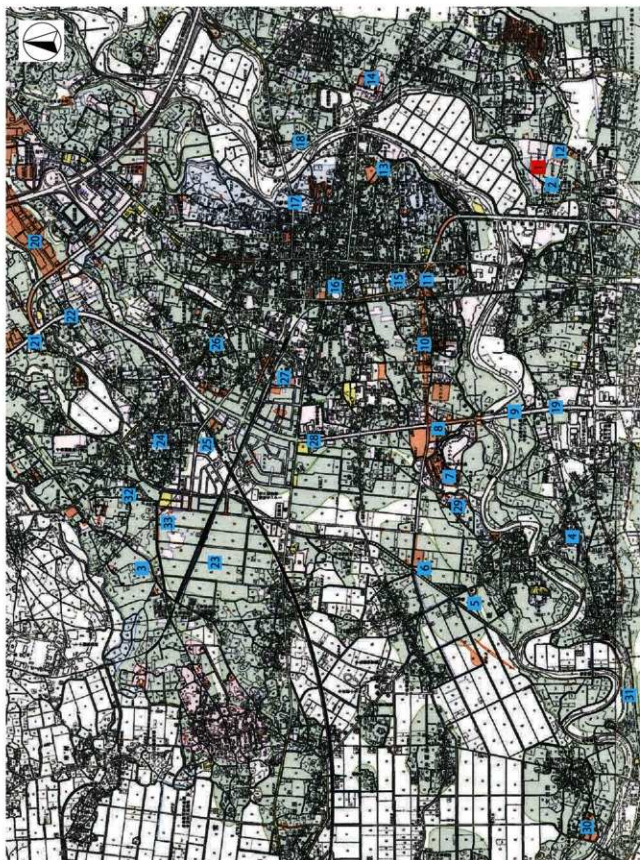
次に弥生時代は、前期と中・後期で様相が異なる。まず前期では発見された遺跡が非常に少ない。仲田遺跡の土坑より口縁二重突帯文の壺、東大門先遺跡Ⅱから同じく土坑より氷Ⅱ式に比定される細密条痕の甕が出土している。また、下信濃石遺跡Ⅱからは、弥生前期とすべき良好な土器・石器資料が出土している。次に中期では遺跡数も増え集落址が確認される。湯川下流より、川原端遺跡・森平遺跡・根々井芝宮遺跡・北西の久保遺跡・西一本柳遺跡、内陸部に円正坊遺跡がある。これらの遺跡はいずれも中期後半に比定されるが、中期後半古相は根々井芝宮遺跡のみである。このように中期に至り集落が形成されるようになっても立地は湯川沿岸を指向する。佐久平北部において弥生前期・中期を通して湯川が人々の諸々の活動において重要な位置を担っていたことが解る。後期になると集落は湯川沿岸より内陸部に進出するようになる。北から近津遺跡・宮の前遺跡・周防畑遺跡・上直路遺跡・円正坊遺跡・西一本柳遺跡・西一里塚遺跡などがあげられる。これらの遺跡は田切地形が消滅し、濁川により形成された低地を取り囲むように立地し、佐久平北部における稲作生産の本格的な導入を示唆している。また、当該時期の遺跡からは西近津遺跡より国内で最大級となる18×9.5mの竅穴住居址が発見されたり、上直路遺跡からは屋内埋葬という特異な形態の土坑墓内より、埋葬者腕に装着された状態で銅釧15本が発見されている。

次の古墳時代前期は弥生後期の集落展開に比べ、規模が非常に縮小し立地も限定的となる。湯川沿いの小さな平地や田切台地でも縁辺など、弥生後期に開発した水田地帯を放棄するような状態である。つづく中期前半では、当該期に比定される遺跡が佐久地域において北西の久保遺跡のみであり、前期にもまして遺跡数が激減する時期である。中期前半は他地域においても遺跡数が減少するが、佐久地域の少なさは異常である。これとは対照的に中期後半から後期の所謂、5世紀後半から6世紀にかけての遺跡数の増加は目を見張るものがある。特に北部においては、弥生後期に集落が展開した地域とともに、新たに田切台地の内陸部まで集落が広がっていく。特に上直路遺跡・芝宮遺跡・聖原遺跡といった遺跡では累積で100軒単位の集落が形成されている。この現象は佐久平において、5世紀後半以降の集落遷地の理由が大きく変わった、或いは加わったことを意味する。一つの可能性としては、水田経営に適さない高燥台地の内陸にあえて集落を展開するという事は集落維持のための生産基盤を牧経営等に置いた結果とも考えられる。

続く奈良時代は古墳後期と同じような場所に集落が展開し、生活・生産活動の継続性が見て取れる。平安時代になると、集落内の住居址数は増すが住居は小型化が顕著であり、平安時代後半には散村化の傾向がある。また、近年に周防畑遺跡群付近の調査事例で「大井」の墨書や刻書が記載された土器が多く出土し、古代・大井郷の核地域であろうことが推測されている。また、仲田遺跡からは花卉双蝶八花鏡や「□□寺」の墨書土器が出土し寺院の存在を示唆している。

その後、鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井荘に土着し、大井氏を名乗るようになる。この地域は大井氏により発展し、『四隣譚載』によれば「その賑わい国府にまされり」と例えられる隆盛を誇った。これらの関連遺跡としては現岩村田市街地付近に集中し、苑池の跡が発見された柳堂遺跡や龍雲寺との関連が推定される下信濃石遺跡、漆工房跡と考えられる北一本柳遺跡、また、大井氏の居城と考えられている大井城址などがある。

近世になってからは、地域内を「中山道」が通過し、それに伴う宿場整備で岩村田宿は繁栄する。特に岩村田は佐久甲州街道が通り、北国街道も近く中世の隆盛を彷彿とさせる状態であった。町屋調査としては中山道沿いの中宿遺跡等があげられる。以上、各時代の概観である。



第3图 周边遗迹位置图

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡群名	遺跡名	所在地	検出遺構	報告書
1	野馬彦遺跡群	野馬彦遺跡Ⅶ	鎌久保		本報告書
2	野馬彦遺跡群	野馬彦遺跡Ⅵ	鎌久保	竪穴住 27 (古墳～平安)、竪穴式遺構 3、竪立 2、土坑 13、溝状遺構 8	第 239 集
3	近津遺跡群	長土呂字近津森下	長土呂字近津森下	竪穴住 605 (縄文～平安)、竪立 80、土坑 3、周溝墓 13	既調査
4	宮の上遺跡群	根々井芝宮遺跡	根々井芝宮	竪穴住 (弥生 43・古墳 3・平安 14)、竪立 3、土坑 27、溝 5	第 49 集
5	根々井大塚古墳	根々井大塚	根々井大塚	方墳墳丘墓 1	年報 9
6	西一里塚遺跡群	西一里塚遺跡	岩村田字西一里塚	竪穴住 (弥生後期 11)、周溝墓 1、溝溝、土坑 7、溝 6	
7	岩村田遺跡群	北西の久保遺跡	岩村田字北西ノ久保	竪穴住 (弥生中期 91・弥生後期 38・古墳中期 20)	
8	岩村田遺跡群	西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ	岩村田字西一本柳	竪穴住 201 (弥生～平安)、竪立 45、土坑 12、溝 11	第 73 集
		西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ	岩村田字上樋田	竪穴住 (弥生中期 3・弥生後期 1・古墳後期 2・奈良 1)、溝	第 91 集
		西一本柳遺跡Ⅶ	岩村田字西一本柳	竪穴住 (弥生中期 7・後期 2・古墳後期 6・奈・平 1)、竪立 5、土坑 8、溝 6	年報 8
		西一本柳遺跡Ⅷ	岩村田字下樋田	竪穴住 (弥生中期 9・弥生後期 7・古墳中期 6・古墳後期 42・奈良 16・平安 9・不明 2)、竪立 30、土坑 51、溝 13	第 109 集
		西一本柳遺跡Ⅸ	岩村田字西一本柳	竪穴住 (古墳後期 16・奈良 1・平安 2・竪穴状 2)、竪立 9、土坑 12	第 113 集
		西一本柳遺跡Ⅹ	岩村田字西一本柳	竪穴住 (弥生中期 34・弥生後期 12・古墳中期 12・古墳後期 15・奈良 21・平安 9・不明 2)、竪立 14、土坑 19、溝 14	年報 14
		西一本柳遺跡Ⅺ	岩村田字下樋田	竪穴住 (弥生中期 1・弥生後期 1)、溝	年報 13
		西一本柳遺跡Ⅻ	岩村田字下樋田	竪穴住 (古墳後期 5・奈良 1・竪穴式遺構 6)、竪立 2	第 125 集
		西一本柳遺跡Ⅼ	岩村田字下樋田	竪穴住 (弥生中期 13・弥生後期 8・古墳中期 2・古墳後期 2・奈良 2・平安 1・不明 8)、竪立 5	第 139 集
		西一本柳遺跡ⅭⅣ	岩村田字上樋田	竪穴住 (弥生中期 17・後期 17・古墳中期 3・後期 7・奈・平 11)、竪立 10、土坑 16、溝 13	第 175 集
		西一本柳遺跡ⅭⅤ	岩村田字宮木上	竪穴住 (弥生中期 3・後期 3・古墳後期 2・奈・平 5)、竪立 3、土坑 5	第 154 集
		西一本柳遺跡ⅭⅥ	岩村田字西一本柳	竪穴住 (弥生中期 12・後期 1・古墳後期 4・奈良 11)、竪立 6、溝 3	第 160 集
西一本柳遺跡ⅭⅦ	岩村田字西一本柳	竪穴住 (弥生中期 1・後期 2・奈良 2)、溝	第 169 集		
9	寺畑遺跡群	仲田遺跡	鎌久保守仲田	竪穴住 (古墳中期 4・後期 6・奈良 10・平安 6)、竪立 11、土坑 6、田上より花卉双線入花籠	第 66 集
10	岩村田遺跡群	北一本柳遺跡Ⅱ	岩村田字北一本柳	竪穴住 4、土塚墓 1、溝 2	年報 14
		北一本柳遺跡Ⅲ	岩村田字北一本柳	竪穴住 (弥生後期 48・縄文後期 11・中世 57)、竪立 13、土坑 310、溝 32	第 175 集
		北一本柳遺跡Ⅳ	岩村田字北一本柳	竪穴住 3、溝 2	第 158 集
11	岩村田遺跡群	東大門上遺跡Ⅱ	岩村田字東大門先	竪穴住 (古墳後期 2・奈良・平安 15)、竪立 21、土坑 9、溝 10	第 175 集
12	野馬彦遺跡群	野馬彦遺跡Ⅱ・Ⅲ	鎌久保野馬彦	竪穴住 1、竪穴式遺構 17、竪立 13、土坑 234	第 170 集
13		下信濃石遺跡	岩村田字仁王前	寺院関連 1、竪穴式遺構 10、土坑 47、古瀬戸灰輪水涵	第 134 集
14		蛇塚古墳	安原字蛇塚	後期古墳 3 基、竪穴住 3、竪立 1	第 78 集
15	岩村田遺跡群	観音堂遺跡	岩村田字観音堂	竪穴住 (平安 1・中世 27)、土坑 170、土塚墓 4、竪立 1	第 70 集
16	岩村田遺跡群	柳堂遺跡	岩村田字柳堂	竪穴住 (弥生後期 2・平安 1・中世 33)、竪立 2、土坑 203、周溝墓 3、池	第 85 集
17		大井城址	岩村田字古城	竪穴住 (古墳後期 15・中世 54)、竪立 3、土坑 285	
18		下小平遺跡	岩村田字下小平	竪穴住 (弥生後期 5・古墳後期 1)、方形周溝墓 2	
19	寺畑遺跡群	寺畑遺跡	鎌久保守仲田	竪穴住 (弥生 1・平安 1)、縄文草創期 (爪形土器・石器)	第 40 集
20	長土呂遺跡群	聖原遺跡	長土呂字聖原	竪穴住 (古墳後期 155・奈良平安 663)、竪立 869、土坑 370、溝 40	第 163 集～
21	芝宮遺跡群	下芝宮遺跡 1～Ⅳ	長土呂字下芝宮	竪穴住 (古墳中期 5・後期 2・平安 2)、竪立 6	第 9 集
22	長土呂遺跡群	下聖原遺跡 1・Ⅱ	長土呂字下聖原	竪穴住 (弥生後期 4・古墳中期 13・後期 25・奈良 1・平安 15)、竪立 18	第 9 集
23	周防津遺跡群	長土呂	長土呂	竪穴住 92 (弥生～平安)、竪立 9、円形周溝墓 15、土坑 422	既調査
24	長土呂遺跡群	長土呂館址	長土呂	中世館址	
25	長土呂遺跡群	下伯母塚遺跡	長土呂字下伯母塚	竪穴住 (弥生後期末)、溝址、銅鑊	第 110 集
26	板坂安遺跡群	上直路遺跡	岩村田字上直路	竪穴住 (弥生後期 2)、銅網 11	年報 5
27	円正坊遺跡群	円正坊遺跡Ⅱ	岩村田字円正坊	竪穴住 (弥生中期 2・弥生後期 1・古墳後期 2・平安 2)、竪立 1、古墳 1	第 53 集
		円正坊遺跡Ⅳ	岩村田字円正坊	竪穴住 (古墳中期 7・後期 23・平安 4)、方形・円形周溝墓 10	第 102 集
		円正坊遺跡Ⅵ	岩村田字円正坊	竪穴住 37、竪立 4、垂樋墓 1、土坑 26	年報 15
		円正坊遺跡Ⅶ	岩村田字円正坊	竪穴住 (弥生～平安 41)、竪立 2、土坑 11、溝 3、円形周溝墓 1	第 185 集
28	岩村田遺跡群	松の本遺跡 1・Ⅱ	岩村田字松の本	竪穴住 (弥生～平安 160)、竪立 1、土坑 1、溝 6	第 91 集
29	鳴尻遺跡群	五里田遺跡	根々井字五里田	竪穴住 (弥生中期 43)、周溝墓 5、古墳址 2、土坑 37	第 74 集
30	大和田遺跡群	川原端遺跡	鳴瀬字川原端	竪穴住 (弥生中～後期 13・古墳 49)、竪立 20、土坑 22、溝 24	第 89 集
31	香塚遺跡群	香塚遺跡	横和字香塚	竪穴住 13 (弥生中期後半・古墳前期)、竪立 6、土坑 17	第 157 集
32	周防津遺跡群	宮の前遺跡 1・Ⅱ他	長土呂字宮の前	竪穴住 350 (弥生後期～平安)、竪立 112、土坑 176、溝 68、周溝墓	第 240 集
33	周防津遺跡群	大豆田遺跡Ⅳ	長土呂	竪穴住 26 (弥生後期～平安)、竪穴 3、竪立 33、土坑 139、溝 76	第 229 集

第三章 調査の方法

第1節 調査の方法

遺跡名・調査区

遺跡名は、佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、野馬窪遺跡Ⅶとした。ローマ数字は調査回数である。調査区を網羅するように、国家座標に沿って40×40mの区画を設定し、北よりローマ数字を付した。この40mの区画は北東隅を起点に4mの各グリットを設定した。グリットは野馬窪遺跡Ⅳと共通の名称を使用した。

遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号はアルファベットで以下の決まりに従い付けられている。

- | | |
|-------------------------------|--------|
| ○3文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。 | S=猿久保 |
| ○3文字の2番目は遺跡群名のローマ字表記の頭文字である。 | N=野馬 |
| ○3文字の3番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。 | K=窪 |
| ○末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す。 | Ⅶ=7地点目 |

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

- | | |
|----------------------------------|--------|
| H=住居址(竪穴住居址) | M=溝状遺構 |
| F=掘立柱建物址 | T=特殊遺構 |
| D=土坑(陥穴、貯蔵穴等) | |
| P=ピット(柱状のものを建てたと思われる、多くは小径の掘り込み) | |

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は4分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。ピットも土坑と同様であるが、遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遺り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

写真

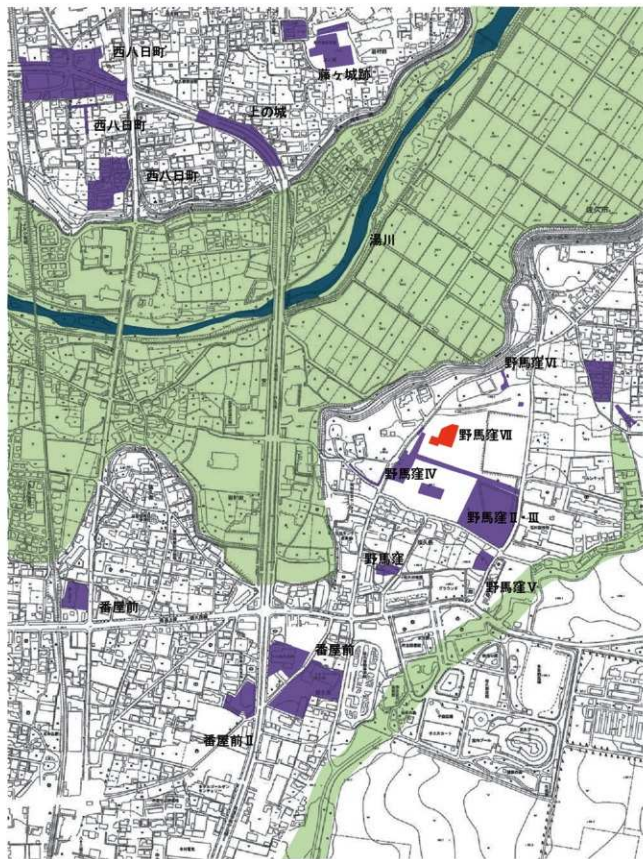
現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は手で竹ブラシを用い行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。図面は遺構を1/40で修正し、仮図版を作成した。遺物は1/1で実測し、1/2で仮図版を作成した。

報告書

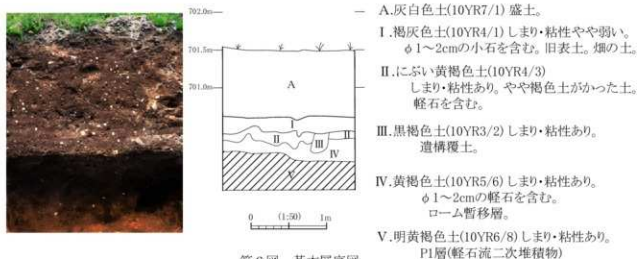
文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



第4図 調査遺跡位置図

第2節 基本層序

本調査区の土層は基本的に6層に分層される。A層は盛土で調査区全体を0.7～1.5mの厚みで覆っていた。遺構確認面はII層のにぶい黄褐色土であり、V層がいわゆるP1層であった。



第3節 遺構と遺物の概要

検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺 構	竪穴住居址	4軒 (平安時代)
	土 坑	27基
	溝状遺構	3本

遺 物 縄文土器(前期)・灰釉陶器・土師器・須恵器・石器・鉄製品・陶磁器類



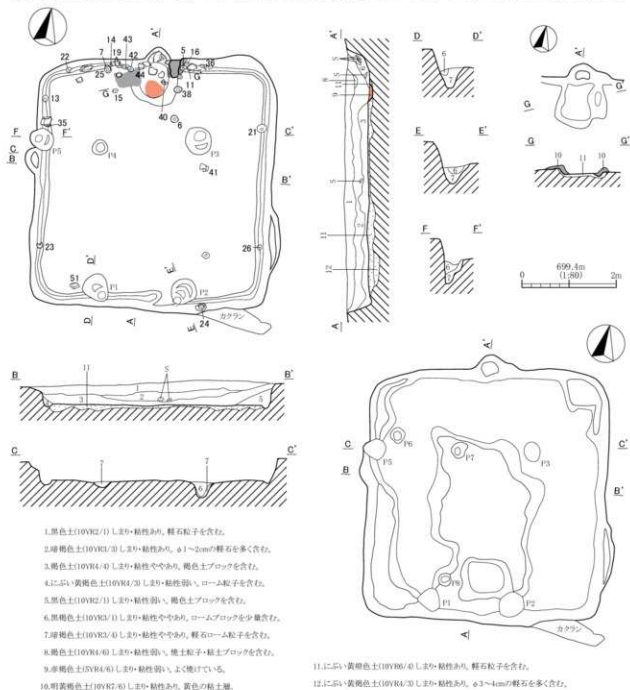
調査地点より北に浅間山を望む

第IV章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

(1) H1号住居址

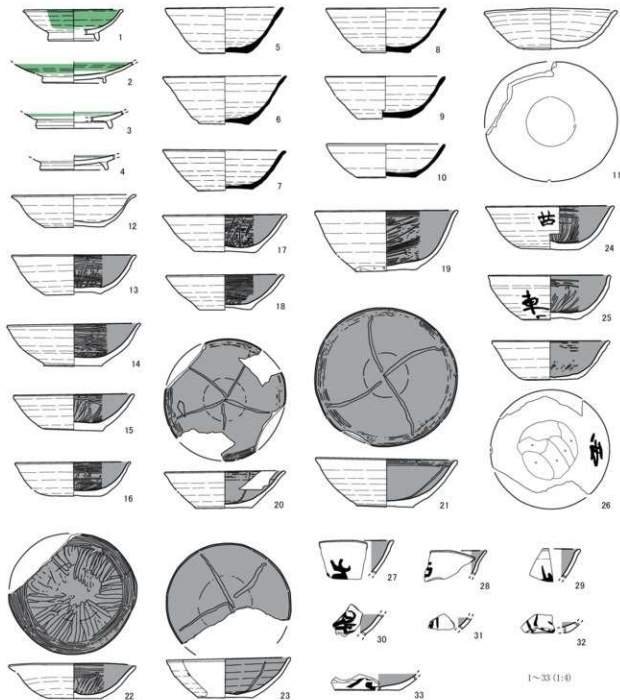
本址は調査区西側のM-エ-8・9、M-オ-8・9Grで検出された。形態はほぼ正方形である。規模は南北長4.68m・東西長4.40mで、床面積は21.06㎡を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北東コーナー付近で0.48mを測る。床は硬質であり、特にカマド前面と住居中央が顕著に硬質化している。覆土は自然堆積を示し、ピットは8か所確認され、P1～P3、P5が主柱穴と考えられる。



第7図 H1号住居址実測図

各ビットの規模はP1が径0.58m・深さ0.67m、P2が径0.60m・深さ0.63m、P3が径0.60m・深さ0.65m、P4が径0.33m・深さ0.12m、P5が径0.51m・深さ0.51m、P6が径0.34m・深さ0.25m、P7が径0.36m・深さ0.22m、P8が径0.30m・深さ0.27mを測る。壁溝は住居全体に巡り、深さは0.02～0.08mを測る。住居址掘方は住居址中央部が一段高くなる形状で、段差は0.08～0.13mを測る。

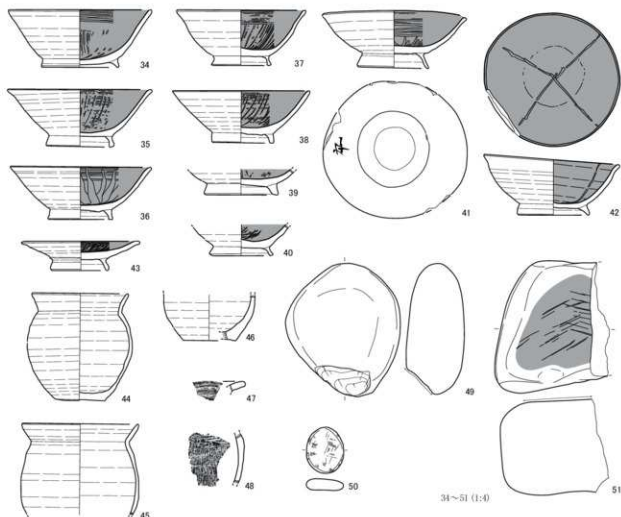
カマドは北壁中央部に構築されており、袖部は一部しか残存しておらず、カマド構築材と考えられ軽石が煙道部に破棄されていた。火床部は顕著な焼けが確認され、硬質化していた。また、カマド周辺部からは土師器坏を中心にまとまって出土し、重ねた状態の土器も確認された。



第8図 H1号住居址出土遺物実測図(1)

本址からの出土遺物は覆土やカマド周辺部からまとまって出土した。1～4は灰釉陶器の碗と皿である。1と2は刷毛掛けによる施軸と考えられる。5～10は須恵器環である。11と12は土師器坏としたが、いわゆる須恵器の生焼けのような状態で、成形状は須恵器と酷似する。また、11は聖原遺跡等で指摘された「杓状坏」と呼ばれる形状で、楕円形を呈する。13～33は土師器坏である。内面はすべて黒色処理が施され、暗文状のミガキが施された坏が20～23の4点が確認された。また、24～33は墨書や墨痕が確認できる。判読できる土器として、25は「車」、26は「西」がある。34～42は土師器碗である。いずれも内面黒色処理が施されている。また、41は体部外面に「卒」と墨書が確認できる。42は内面見込み部に暗文風のミガキがある。43は土師器皿である。内面に黒色処理が施されている。44～48は土師器甕である。44～46はクロコ成形の甕でいずれも小型のものである。47と48はいわゆる「伊勢甕」の口縁部と胴部の破片と考えられる。いずれも白色の胎土で、在地の土器とは明らかに異なる。49は叩き痕のある石で、50は磨き石と考えられる。51は欠損しているが、片面に顕著な磨り痕が確認でき、台石的使用が考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀後半の所産時期が考えられる。



第9図 H1号住居址出土遺物実測図(2)

(2) H2号住居址

本址は調査区西側のM-エ-8・9、M-オ-8・9Grで検出された。形態は長方形である。規模は南北長3.00m・東西長3.50mで、床面積は9.54㎡を測る。住居址の主軸方向はN-5°-Eを測る。

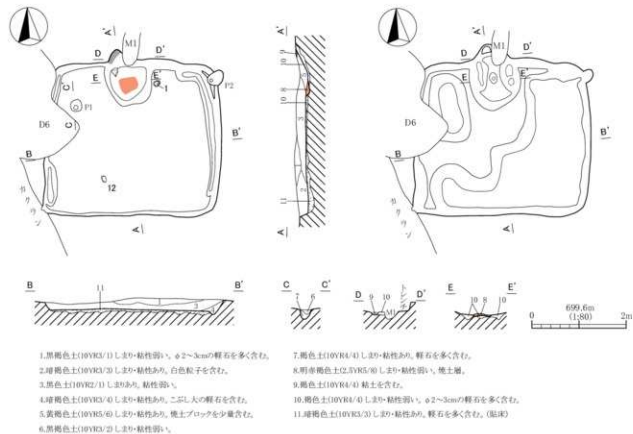
第2表 H1号住居址出土遺物観察表(1)

H1	種別	形種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値() 保存値() 丸数●	
			口径(横)	底径(縦)	高さ(厚)	内 面	外 面		
1	民輪陶器	碗	(10.4)	(5.5)	3.3	ロクロナデ→施釉(ハタ)	ロクロナデ→裏台貼付→施釉(ハタ)	伊能実測	Ⅲ区
2	民輪陶器	碗	-	6.8	(2.3)	ロクロナデ→施釉(ハタ) 内面のみみ部に墨むけきの痕跡あり みこみ部スレスレ	ロクロナデ→裏台貼付→施釉(ハタ)	完全実測	Ⅳ区
3	民輪陶器	碗	-	(8.2)	(1.8)	ロクロナデ→施釉 内面のみみ部に墨むけきの痕跡あり みこみ部スレスレ	ロクロナデ→裏台貼付→施釉	伊能実測	Ⅲ区
4	民輪陶器	碗	-	(7.2)	(1.6)	ロクロナデ→施釉 内面のみみ部に墨むけきの痕跡あり みこみ部スレスレ	ロクロナデ→裏台貼付→施釉	伊能実測	Ⅲ区
5	甕形器	杯	12.5	5.0	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	
6	甕形器	杯	13.2	5.6	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	
7	甕形器	杯	13.1	5.9	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	
8	甕形器	杯	12.8	5.3	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	Ⅲ区
9	甕形器	杯	(12.8)	5.8	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	Ⅳ区
10	甕形器	杯	(12.6)	(6.4)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	伊能実測	Ⅲ・Ⅳ区
11	土師器	杵状杯	(14.2)	6.0	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ→底面貼付→施釉(左)	完全実測	
12	土師器	杯	(13.2)	(6.0)	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	伊能実測	Ⅳ区
13	土師器	杯	13.2	5.7	4.3	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	
14	土師器	杯	14.2	6.2	4.5	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(左)	完全実測	
15	土師器	杯	12.8	6.4	3.9	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	
16	土師器	杯	(12.2)	7.0	3.6	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	
17	土師器	杯	13.1	6.7	4.1	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測 口縁部、内側に 保存者	Ⅳ区
18	土師器	杯	(12.4)	(5.4)	3.7	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	カマド
19	土師器	杯	15.2	6.4	4.4	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→底面と内面→ハタケズリ	完全実測	
20	土師器	杯	12.9	5.9	4.0	ミヅキ→緑文→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区
21	土師器	杯	15.0	6.1	5.3	ミヅキ→緑文→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(左)	完全実測	保存者
22	土師器	杵状杯	(13.5)	5.8	3.7	ミヅキ→緑文→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→内面→ハタケズリ	完全実測	
23	土師器	杯	13.1	5.8	4.3	ロクロナデ→緑文→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)後 内面→ハタケズリ	完全実測 墨書あり	
24	土師器	杯	13.7	6.0	4.7	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	墨書あり
25	土師器	杯	13.0	6.5	4.8	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)	完全実測	墨書あり
26	土師器	杯	(12.5)	5.9	4.2	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→施釉(右)→ハタケズリ	完全実測 墨書あり(西)	
27	土師器	杯	-	-	-	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	墨書あり Ⅳ区
28	土師器	杯	-	-	-	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	墨書あり Ⅲ区
29	土師器	杯	-	-	-	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	墨書あり Ⅰ区
30	土師器	杯	-	-	-	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	墨書あり Ⅰ・Ⅲ区
31	土師器	杯	-	-	-	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	墨書あり Ⅳ区
32	土師器	杯	-	-	-	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	墨書あり Ⅲ区
33	土師器	杯	-	-	-	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	墨書あり Ⅰ区
34	土師器	碗	(15.2)	(8.2)	6.1	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	伊能実測	Ⅲ区ホリ Ⅳ区
35	土師器	碗	15.3	7.2	6.1	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測	Ⅲ区
36	土師器	碗	15.0	6.9	5.6	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測	Ⅰ区
37	土師器	碗	(13.7)	6.3	5.9	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測	カマド
38	土師器	碗	14.6	6.6	5.5	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測	
39	土師器	碗	-	7.9	(2.7)	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測	カマド
40	土師器	碗	-	6.8	(3.0)	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測	
41	土師器	碗	(15.3)	7.6	6.1	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測 墨書あり 底面あり	Ⅰ区
42	土師器	碗	14.5	7.6	6.4	ロクロナデ→緑文→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測	
43	土師器	皿	12.6	6.2	3.1	ミヅキ→黒色処理	ロクロナデ→底面貼付→裏台貼付	完全実測	

第3表 H1号住居址出土物観察表(2)

H1	種別	器種	法量			成形・器種・文様		所在地(残存箇所)	
			口径(横)	口径(縦)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
44	土師器	小型 ロタロナダ	(10.3)	5.3	11.4	ロタロナダ	ロタロナダ-底部ホリ→一部ヘラズリ	完全実測	
45	土師器	小型 ロタロナダ	(12.4)	-	(9.6)	ロタロナダ	ロタロナダ	回転実測	Ⅱ区
46	土師器	小型 ロタロナダ	-	5.6	(3.8)	ロタロナダ	ロタロナダ-底部刻線(筋)有り	完全実測	Ⅱ・Ⅲ区 ケン
47	土師器	壺 (伊勢産)	-	-	-	ロタロナダ	ロタロナダ	細片実測 基本 同一-器種不明	I区
48	土師器	壺 (伊勢産)	-	-	-	ミガキ	ハケナダ	断面実測 基本 同一-器種不明	I区
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
49	燧石	石	14.2	12.2	6.1	1220.00	焼熱なし 下部部に磨行痕		I区
50	燧石	石	4.9	3.9	1.2	27.86	焼熱なし 全体に十字		Ⅱ区
51	石英	石	(14.0)	(12.2)	(10.7)	(2845.00)	焼熱なし 片側欠損 使用面1 磨痕あり		

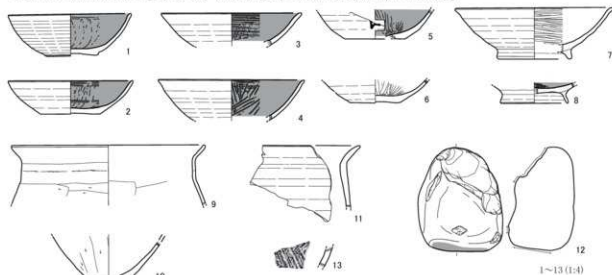
壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北東コーナー付近で0.36mを測る。床は硬質であり、特にカマド前面が顕著に硬質化していた。覆土は自然堆積を示す。ピットは2か所で確認された。各ピットの規模はP1が径0.26m・深さ0.24m、P2が径0.36m・深さ0.07mを測る。住居址の掘方は南東コーナーに向かって掘り下げであり、カマド前面より0.10m程深くなっていた。カマドは北壁中央部で検出された。火床部は顕著に焼けていた。構造は、煙道部に一部粘土が検出されたが、袖部には構築材も無く、構造は不明である。



第10図 H2号住居址実側図

本址からの出土遺物は、覆土中やカマド前から出土した。1～6は土師器坏である。6以外は内面黒色処理が施されている。5は体部外面に判読不明な墨書が確認できる。7と8は土師器碗である。8は内面黒色処理が施されている。9～10は土師器甕で、いわゆる「武蔵甕」と呼ばれるものである。11はロクロ成形の甕である。12は磨り石と考えられ、一部に磨りが確認できる。13は弥生後期の箱清水式土器の甕片と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀後半の所産時期が考えられる。



第11図 H2号住居址出土遺物実測図

第4表 H2号住居址出土遺物観察表

H2	種類	形状	法 量			内 面		外 面		鑑定種() 残存部() 丸座()	備 考	出土地層
			口径(長)	底径(幅)	深高(厚)	内 面	外 面					
1	土師器	坏	13.0	5.8	4.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナゲ→底面砂輪赤きり(右)	完全実測	口唇部に保存者			
2	土師器	坏	(13.2)	06.0	3.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナゲ→底面砂輪赤きり(左)	同軸実測		Ⅱ区		
3	土師器	坏	(14.9)	-	(3.2)	ミガキ→黒色処理	ロクロナゲ	同軸実測		Ⅰ区		
4	土師器	坏	(15.6)	-	(4.3)	ミガキ→黒色処理	ロクロナゲ	同軸実測		Ⅱ区	カマド	
5	土師器	坏	-	(6.4)	(3.1)	ミガキ→黒色処理	ロクロナゲ→底面赤きり	同軸実測	墨書あり	ケン		
6	土師器	坏	-	5.5	(2.3)	ミガキ	ロクロナゲ→底面砂輪赤きり(右)	完全実測		ケン		
7	土師器	碗	(16.8)	(8.0)	5.4	ミガキ	ロクロナゲ→底面砂輪赤きり(右)→高台基付	同軸実測		Ⅰ・Ⅱ区		
8	土師器	碗	-	(7.2)	(2.1)	ミガキ→黒色処理	ロクロナゲ→高台基付	同軸実測		ケン		
9	土師器	武蔵甕	(20.4)	-	(6.4)	ヘラナゲ	ヘラナゲ	同軸実測		Ⅰ・Ⅱ区		
10	土師器	武蔵甕	-	(4.8)	(4.6)	磨粒	胴部ヘラナゲ 底面ヘラナゲ	同軸実測		Ⅱ区		
11	土師器	小型 ロクロ甕	-	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	前方実測		Ⅱ区		
12	弥生	甕	-	-	-	ナゲ	磨粒付木文	新設実測	図本	Ⅰ区		
No.	形 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考				出土地層	
12	磨・磨石	石	11.0	8.9	4.8	899.36	視触なし 上端部に磨き 下端部にナリ面					

(3) H3号住居址

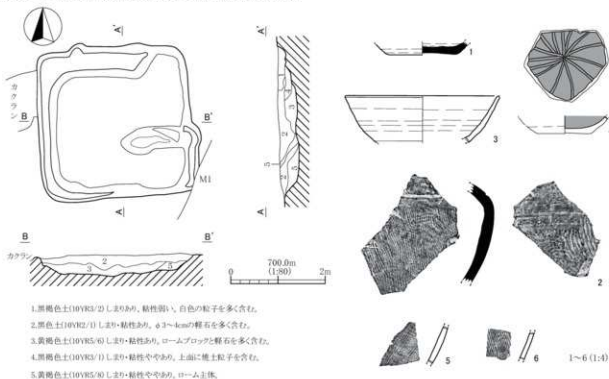
本址は調査区西側のM-カ-5・6、M-キ-5・6Grで検出された。形態はほぼ正方形である。長軸方位はN-88° - Eを測る。規模は長軸の東西長2.94m、短軸の南北長2.76mを測る。床面積は8.58㎡を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北西コーナー付近で0.35mを測る。本址は貼り床状の部分は確認できなかった。住居内覆土を掘り下げの途中、2層と3層の間で土質の変化があり、いったん精査を行った。しかし、しまった床は確認されず、2層も平坦ではなかったため、地山ま

で掘り下げを行った。

結果、遺構底面は凹凸があり、北壁と南壁の一部と西壁にテラス状の段を確認した。また、東壁中央で、深さ0.06～0.12mの土坑状の掘り込みを検出した。カマド・炉は確認されなかった。

本址からの出土遺物は少なく6点を図示した。1は須恵器杯の底部破片である。3と4は土師器杯で、4は見込み部に暗文風のミガキが施され、内面黒色処理が施されている。2は須恵器甕の胴部破片である。肩部に一本の沈線が巡る。5と6は弥生後期の箱清水式土器の甕片と考えられる。

本址はこれらの出土遺物から9～10世紀代の所産時期が考えられる。遺構の性格は、火床を持たないことから作業小屋的な使用が考えられる。



- 1.黒褐色土(04YR3/2)しまりあり・粘性弱い、白色の粒子を多く含む。
- 2.黒色土(04YR2/1)しまり・粘性あり、φ3～4cmの軽石を多く含む。
- 3.黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性あり、ロームブロックと軽石を多く含む。
- 4.黒褐色土(04YR3/1)しまり・粘性ややあり、土面に軽土粒子を含む。
- 5.黄褐色土(10YR5/3)しまり・粘性ややあり、ローム土塊。

第12図 H3号住居址及び出土遺物実測図

第5表 H3号住居址出土遺物観察表

H3	種類	形状	寸法			成形・装飾・文様		埋定層()埋存層()丸出(●)	
			口径(径)	高さ(幅)	胴高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器 杯	-	(7.0)	(1.4)	-	ロタロナゲ	ロタロナゲ一底面同軸糸切り	同軸実測	IV区
2	須恵器 甕	-	-	-	-	ロタロナゲ 当具板	ロタロナゲ 平行タタキ 平行底線	断面実測	I区
3	土師器 杯	(16.4)	-	(5.0)	-	ロタロナゲ	ロタロナゲ	同軸実測	II区
4	土師器 杯	-	(5.9)	(1.9)	-	暗文 黒色処理	ロタロナゲ一底面同軸糸切り(右)	完全実測	ケン
5	弥生 甕	-	-	-	-	ヘラミガキ	横線斜走文	断面実測	柘本 IV区
6	弥生 甕	-	-	-	-	ヘラミガキ	横線斜走文	断面実測	柘本 I区

(4) H4号住居址

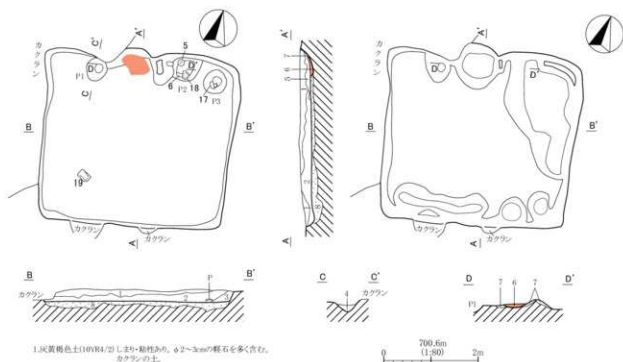
本址は調査区北側のE-カー10、E-キ10、L-カー1、L-キ16rで検出された。形態はほぼ正方形である。規模は南北長3.42m、東西長3.76mで、北壁にカマドが構築されており、主軸方位はN-11°-Wを測る。床面積は13.14㎡を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北東コーナー付近で0.25mを測る。床は硬質であり、特にカマド前面と住居中央が顕著に硬質化していた。覆土は自然堆積を示し、ビットは3ヶ所確認され、P2とP3は貯蔵穴と考えられる。各ビットの規模はP1が径0.46m・深さ0.22m、P2が径0.74m・深さ0.10m、P3が径0.52m・深さ0.19mを測る。

住居址の掘方は、北東コーナーと南壁際が一段深く掘り込まれていた。北東コーナーの掘り込み深さは0.20mを測り、底面は凹凸が激しかった。

カマドは北壁中央で検出され、右側の袖部一部と火床部が残存していた。袖部は黒色土と粘土ブロックの混合土で構築されており、火床部の焼土はよく焼けており、厚みは0.08mを測る。

本址からの出土遺物は、覆土中やカマド周辺からまとまって出土した。1は須恵器坏である。2は須恵器甕の口縁部から頸部の破片である。3は同じく須恵器甕の胴部破片である。4～14は土師器坏である。4は体部外面に焼成後と考えられるヘラ記号が確認できる。5は体部外面に「庄」と読める墨書がある。9～14も墨書或いは墨痕と考えられ、10は「庄」と考えられる。8は土師器坏であるが、体部外面を赤外線観察したところ、図示したような円形の模様を確認できた。15は土師器甕であり、内面黒色処理が施されている。16と17は土師器甕である。18は敲き石と考えられ、両極の角に敲き痕が確認できる。19は床面上に置かれたような状態で出土した。両面に顕著な磨り痕と線状の擦痕が確認できる。20は石鏃破片である。21～26は縄文前期の深鉢破片と考えられる。27は判読できないが戦前の銅貨と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より9世紀後半の所産時期が考えられる。



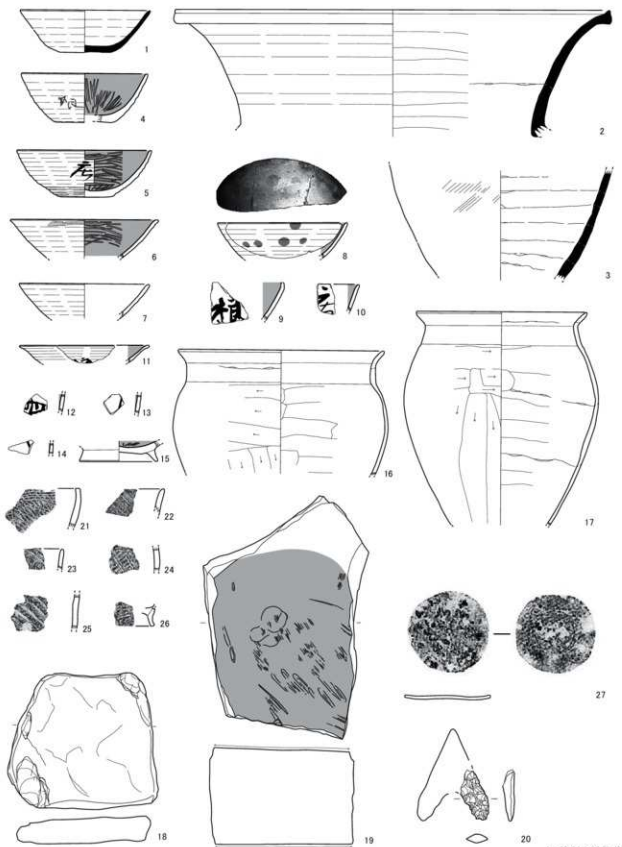
1. 灰黄褐色土(10VR4/2)しまり・粘性あり、φ2~3cmの軽石を多く含む。カクランの土。
2. 黒褐色土(10VR3/1)しまり・粘性あり、ロームブロックを多く含む。
3. 暗褐色土(10VR3/3)しまり・粘性ややあり。
4. 黒褐色土(10VR3/1)しまり・粘性あり、ローム配子が多し。
5. 黒色土(10VR2/1)しまり・粘性ややあり、焼土ブロックを多く含む。

6. 赤褐色土(2.5VR5/3)しまり・粘性弱い。火床部でよく焼けている。
7. 黄褐色土(10VR5/6)しまり・粘性ややあり、ローム土と黒色土の混合土。少量の粘土ブロックを含む。
8. 褐色土(10VR4/4)しまり・粘性ややあり、φ2~3cmの軽石を多く含む。上面硬質化している。

第13図 H4号住居址実測図

第6表 H4号住居址出土遺物観察表(1)

H4	種別	図録	法 量		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		測定値() 検出層() 丸底(●)		
			口径(横)	底径(縦)	高さ(厚)	内 面		外 面	備 考
1	須恵器	坏	(13.8)	5.3	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ→底面凹形未切り (右)	北全実測	Ⅱ区
2	須恵器	甕	(46.0)	—	(13.4)	ヘラナデ	ロクロナデ	北全実測	Ⅳ区
3	須恵器	甕	—	—	(14.4)	当具瓶→ロクロナデ	タタキ→ロクロナデ	北全実測	I・II区
4	土師器	坏	(13.4)	(3.4)	5.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底面凹形未切り ヘラ記号	北全実測	Ⅱ区
5	土師器	甕	14.3	5.9	5.0	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面凹形 工具痕	北全実測	墨書あり



第14图 H4号住居址出土遗物实测图

1~19, 21~26 (1:1)
20, 27 (1:1)

第7表 H4号住居址出土遺物観察表(2)

H4	種別	原種	法 器			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		指定値(1)・残存値(2)・丸磨(3)	備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	筒高(厚)	内 面	外 面			
6	土師器	杯	(15.8)	-	(5.1)	ミガキ→黒色地埋	ロクロナデ	ロ線部へラミガキ	別転実測	
7	土師器	杯	(13.8)	-	(3.7)	ナデ	ロクロナデ		別転実測	Ⅱ区
8	土師器	杯	(13.8)	-	(5.8)	ミガキ→黒色地埋	ロクロナデ	円形の印あり	別転実測	Ⅱ区
9	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色地埋	ロクロナデ		破片実測	遺書あり Ⅲ区
10	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色地埋	ロクロナデ		破片実測	遺書あり Ⅲ区
11	土師器	杯	13.8	-	(3.8)	ミガキ→黒色地埋	ロクロナデ		別転実測	遺書あり Ⅲ区在り
12	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色地埋	ロクロナデ		破片実測	遺書あり Ⅰ区
13	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色地埋	ロクロナデ		破片実測	遺書あり Ⅲ区
14	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色地埋	ロクロナデ		破片実測	遺書あり Ⅲ区
15	土師器	碗	-	8.1	(2.2)	押置ミガキ→黒色地埋	脚部ナデ	ロクロナデ→底面(脚部)あり(右)→高台(左)	別転実測	Ⅰ区
16	土師器	武蔵甕	(21.8)	-	(12.1)	へラナデ	へラケズリ		別転実測	Ⅰ区
17	土師器	武蔵甕	(18.0)	-	(22.5)	へラナデ	へラケズリ		別転実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区
21	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ	竹管による平行法跡	縄文	断面実測	柘本 Ⅰ区
22	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ		縄文	断面実測	柘本 Ⅱ区
23	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ		縄文	断面実測	柘本 Ⅲ区
24	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ	竹管による平行法跡	縄文	断面実測	柘本 Ⅲ区
25	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ	沈積		断面実測	柘本 Ⅳ区
26	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ		縄文	断面実測	柘本 Ⅱ区
No.	形 種	表 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考			出土位置
18	磁石	石	14.5	16.9	3.9	1061.96	擦熱なし 奥に磨打痕			
19	台石	石	25.8	17.5	10.5	8300.00	擦熱なし 使用面2 磨痕あり			
20	石鏃	黒曜石	(1.35)	(0.75)	(0.30)	(0.21)	擦熱なし 片断のみ残存			
27	銅貨		2.3		0.1	3.09	一枚 半銭?			Ⅰ区

第3節 土坑

(1) D1号土坑

本址は調査区南東端のL-キー8・9Grで検出された。形態は円形である。規模は径0.84mで、深さは0.52mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(2) D2号土坑

本址は調査区南より中央のL-キー7Grで検出された。形態は不整形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸が1.63m・短軸が0.67mである。深さは最大で0.23mを測る。本址からの出土遺物は小片の土師器坯と図示した陶器片と鉄製品があった。

(3) D3号土坑

本址は調査区南より中央のL-キー7・8、L-キー7・8Grで検出された。形態は不整形で、規模は長軸が2.20m・短軸が1.00mである。深さは0.15mを測る。本址からの出土遺物は図示した打製石斧が1点あったのみである。

(4) D4号土坑

本址は調査区西よりのM-エー7・8Grで検出された。東側が攪乱により削平されていた。形態は不整形で、規模は東西の残存部分が1.31m・南北が1.38mである。深さは0.67mを測る。本址からの出土遺物は欠損しているがスクレイパーが1点出土した。石材は八風山系の緻密黒色安山岩と考えられる。

(5) D5号土坑

本址は調査区西よりM-エー7Grで検出された。東側が攪乱により削平されている。形態は不整形で、規模は東西の残存部分が0.95m・南北が0.95mである。深さは0.49mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(6) D6号土坑

本址は調査区西端のM-キー6・7Grで検出された。西側が攪乱により削平されている。形態は不整形で、規模は南北の長軸が2.58m・短軸が東西で1.32mである。深さは0.59mで、壁高は緩やかに立ち上がる。本址からの出土遺物は小片となった土師器坏片や土師器甕片があった。図示した遺物は磨石と刀子と考えられる鉄製品である。

(7) D7号土坑

本址は調査区南東端のL-カー8Grで検出された。形態は不整系で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部分で東西が1.57m・南北が0.82mである。深さは最大で0.52mを測る。本址の覆土は下層のローム層が巻き上がる様な状態であり、いわゆる「風倒木痕」と考えられる。本址からの出土遺物は無かった。

(8) D8号土坑

本址は調査区東端のL-キー7Grで検出された。形態は楕円形で、長軸方位は東西を示す。規模は長軸が1.90m・短軸が1.03mである。深さは0.56mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。本址からの出土遺物は図示した完形の土師器坏があった。土坑底面より浮いた状態で出土し、体部外面に「平」と考えられる墨書が確認できる。

(9) D9号土坑

本址は調査区北西端のM-カー4Grで検出された。形態は楕円形で、規模は南北の長軸が1.12m・東西の短軸が0.71mである。深さは0.69mを測る。本址からの出土遺物は小片であるが土師器坏と土師器甕があった。

(10) D10号土坑

本址は調査区中央のM-ア・イー4Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が1.20mである。深さは0.29mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(11) D11号土坑

本址は調査区中央のL-コー4Grで検出された。形態は円形で、規模は径が0.71mである。深さは0.22mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(12) D12号土坑

本址は調査区中央のL-コー4Grで検出された。D11号土坑とはM2号溝状遺構に並列したような状態で検出された。形態は円形で、規模は径0.95mである。深さは0.27mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(13) D13号土坑

本址は調査区中央北よりのL-ク・ケー3Grで検出された。形態は円形で、規模は径1.41mである。深さは最大0.14mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(14) D14号土坑

本址は調査区中央北よりのL-ケー3Grで検出された。形態は円形で、規模は径1.00mである。深さは最大で0.17mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(15) D15号土坑

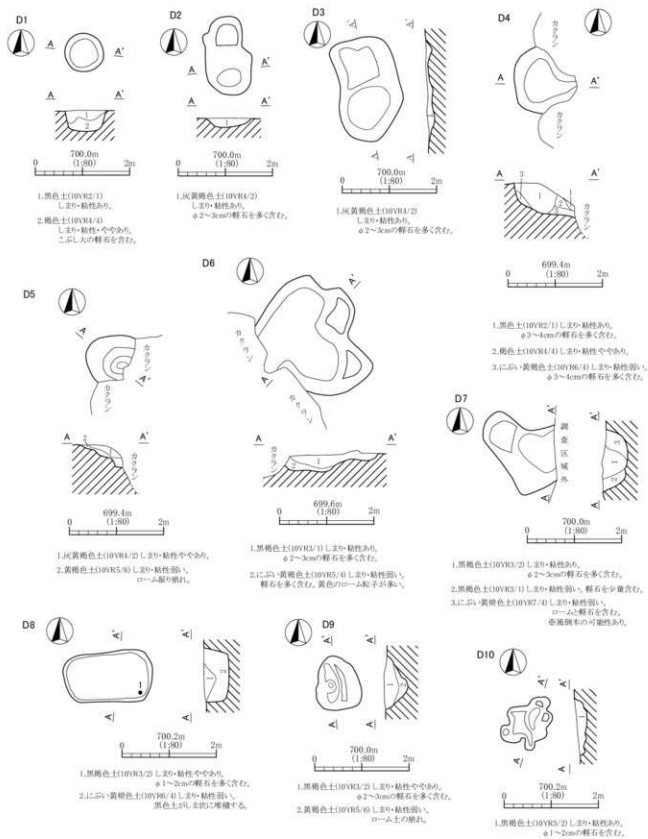
本址は調査区中央北よりL-ケー2Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が1.47m・東西の短軸が1.10mである。深さは0.28mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(16) D16号土坑

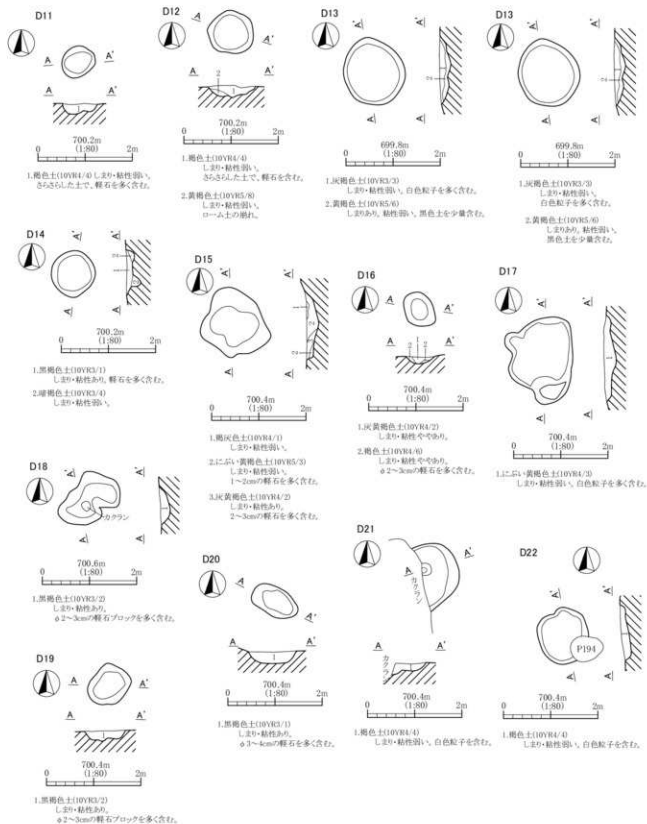
本址は調査区中央西よりのM-ウー3Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北方向の長軸が0.82m・東西方向の短軸が0.53mである。深さは0.27mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(17) D17号土坑

本址は調査区中央北よりのL-ケー2Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が1.82m・東西の短軸が1.26mである。深さは0.22mを測る。本址からの出土遺物は無かった。



第15図 D1~D10土坑実測図



第16図 D11~D22号土坑実測図



第17図 D23～D27号土坑及び出土遺物実測図

(18) D18号土坑

本址は調査区中央北よりL-コー 2Grで検出された。形態は不整形で、規模は東西の長軸が1.42m・南北の短軸が0.69mである。深さは0.28mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(19) D19号土坑

本址は調査区中央北よりのLーコー2・3Grで検出された。形態は不整形で、規模は径0.96mを測る。深さは0.26mで、壁高は緩やかに立ち上がる。本址からの出土遺物は無かった。

(20) D20号土坑

本址は調査区中央北よりのLーコー2Grで検出された。形態は楕円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は東西が長軸で1.05m・南北が短軸で0.60mである。深さは最大で0.32mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(21) D21号土坑

本址は調査区東端のLーコー2・3Grで検出された。西側が攪乱により削平されている。形態は方形と考えられる。規模は南北軸が1.37m・東西軸が残存部分で0.73mである。深さは0.20mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(22) D22号土坑

本址は調査区東端のLーコー2Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が1.22m・東西の短軸が1.08mである。深さは0.18mを測る。本址からの出土遺物は小片であるが内面黒色処理された土師器坏があった。

(23) D23号土坑

本址は調査区中央北よりのLーコー1・2Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が0.98m・東西の短軸が0.51mである。深さは0.27mを測る。本址からの出土遺物は小片の土師器坏が出土した。

(24) D24号土坑

本址は調査区北よりのLーコー1・2Grで検出された。形態は楕円形で、規模は長軸が1.57m・短軸が0.94mである。深さは0.31mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(25) D25号土坑

本址は調査区東端のLーコー2Grで検出された。P202に一部削平されている。形態は不整形で、規模は東西軸が残存で1.98m・南北軸が0.68mである。深さは0.20mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

第8表 土坑出土遺物観察表

D2	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値() 残存値() 丸径(●)	
			口径(径)	底径(径)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
2	土師器	埴輪	-	-	-	ロクロナデ→旋輪	ロクロナデ→旋輪	形面実測 I&C末~I&C 写真	
No.	器種	素材	器大長	器大短	器大厚	重量		備考	出土位置
1	不明	鉄	<14.2>	<1.8>	<0.9>	<51.27>	先端欠損小		
D3	器種	素材	器大長	器大短	器大厚	重量		備考	出土位置
1	打製片岩	石	<7.3>	<6.8>	<1.3>	<74.20>	被熱なし。基部・刃部欠損 摩滅痕あり		
D4	器種	素材	器大長	器大短	器大厚	重量		備考	出土位置
1	スレンイバー	石	<6.1>	<3.8>	<1.2>	<28.69>	被熱なし。右側欠損		
D6	器種	素材	器大長	器大短	器大厚	重量		備考	出土位置
1	磨石	石	8.2	6.8	1.6	98.89	被熱なし。正面にすり面 正面に糸痕		
2	刀子	鉄	<8.8>	1.15	0.5	<11.38>	刃先・基部欠損		
D6	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値() 残存値() 丸径(●)	
			口径(径)	底径(径)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	埴	13.7	5.6	4.1		ミヅギキ→黒色処理 ロクロナデ→底面回転車きり(石)→ 底面外周ヘラケズリ	完全実測 遺書あり(字)	
D27	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値() 残存値() 丸径(●)	
			口径(径)	底径(径)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	埴	<14.6>	-	<3.7>		ヘラミヅギキ→黒色処理 ロクロナデ	形面実測	
2	土師器	武藏焼	<18.3>	-	<4.9>		ロクロナデ 口縁ロクロナデ→腹面ヘラケズリ	形面実測	

(26) D26号土坑

本址は調査区中央北よりのLーケー1Grで検出された。形態は円形で、規模は径0.88mである。深さは最大0.42mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(27) D27号土坑

本址は調査区中央北端のEーキ・クー9Grで検出された。形態は長方形で、規模は東西の長軸が1.39m・南北の短軸が1.10mである。深さは最大で0.36mを測る。

また、本址の北側には焼土を伴うピットが検出された。焼土の径は0.48m・焼土厚みは0.05mでよく焼けていた。土坑の覆土に炭化物等が確認された為、土坑と関連があると考え一体で報告した。本址からの出土遺物は図示した土師器坏と土師器甕の他に、小片であるが須恵器坏片と須恵器甕片があった。

第3節 溝状遺構

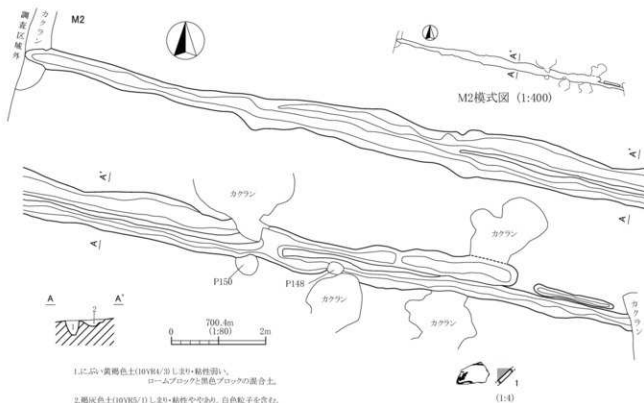
(1) M1号溝状遺構

本址は調査区西端のMーカー4～6Grで検出された。北側が調査区域外となる為全容は不明である。形態は逆台形状を呈する。規模は検出部分で長さ7.40m、幅は0.23～0.38m、深さは0.16～0.26mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(2) M2号溝状遺構

本址は調査区中央のLーキ・ク・ケー4、Mーア・イ・ウー3Grで検出された。検出された溝の長さは24.50m、幅は0.13～0.97m、深さは0.12～0.38mを測る。本址は一部で深さの異なる2本の溝が並走する。

本址からは図示した遺物の他に須恵器坏・甕、弥生土器片が出土している。



第18図 M2号溝状遺構及び出土遺物実測図

(3) M3号溝状遺構

本址は調査区南端のL-ケー5～9Grで検出された。南側が調査区域外となる為全容は不明である。また、一部が浅いため途切れ途切れの検出となった。形態は逆台形状を呈する。規模は検出部分で長さ15.24m、幅は0.06～0.36m、深さは0.04～0.34mを測る。本址からの出土遺物は図示した土器の他、内面黒色処理された土師器坏片や須恵器甕片があった。

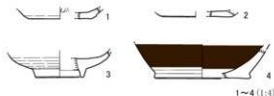
第4節 単独ピットと遺構外出土遺物

今回調査では、単独ピットとして225個のピットを調査した。ピットの分布は調査区内で片寄があり、主に調査区中央からの検出が多かった。

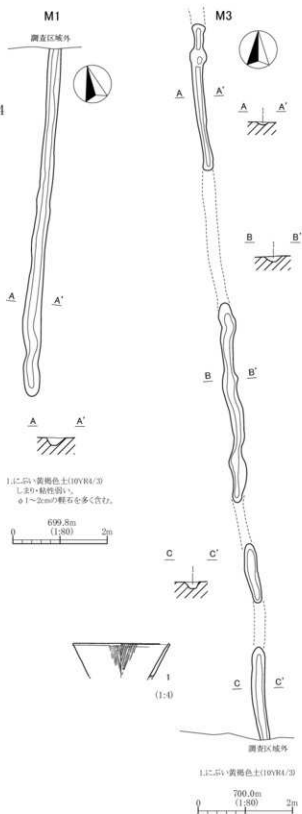
形態は円形や不整形が多かったが、P229のように方形のものも少ないが確認された。規模は径0.20～0.50m・深さ0.10～0.40mを測るものが多かった。柱痕等が確認されたものは無かった。規則的な配列を示すものは少なかったが、P41～P43の3個は東西に並び、柵列的な状況を示す。また、P75・P78・P81・P98も東西方向にピットが並び柵列的な使用が考えられる。

各ピットからの出土遺物は第11表に掲載したが、いずれも小片であり、唯一P218の内面黒色処理された土師器坏だけが、形状が解るものであった。

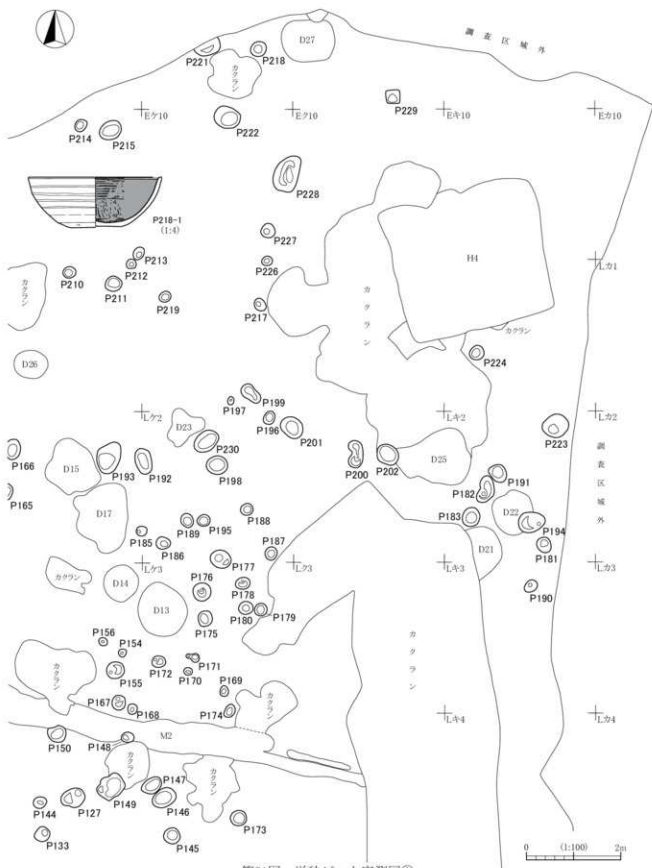
遺構外出土遺物は4点を図示した。1と2は小片であるため確証を得ないが、所謂、カワラケの底部付近と考えられる。いずれも底部に糸切痕がある。3は17世紀後半の伊万里皿である。4は在地の前山焼き鉢で、鉄軸が確認できる。



第19図 遺構外出土遺物実測図



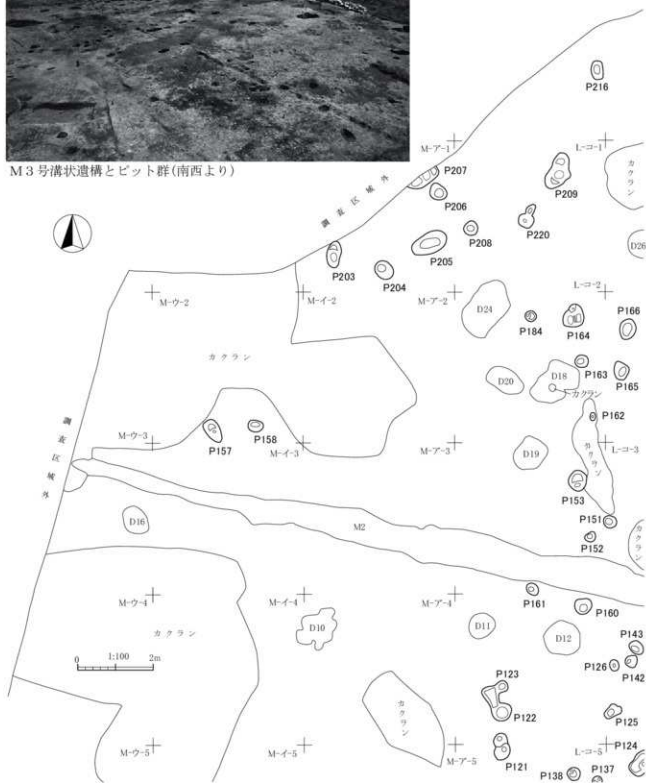
第20図 M1・3号溝状遺構実測図



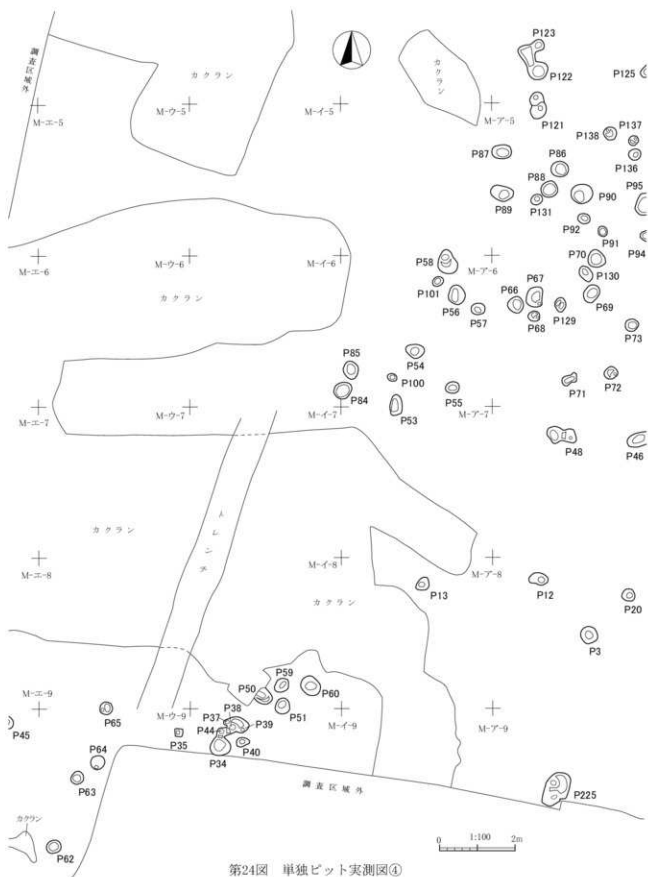
第21図 単独ビット実測図①



M3号溝状遺構とピット群(南西より)



第22図 単独ピット実測図②



第24図 単独ビット実測図④



第25図 単独ピット実測図⑤

第9表 ビット計測表①

()推定 ()残存(単位:cm)

遺跡名	出土位置	長さ	幅	深さ	形状	出土遺物 分類・部位	備考	遺跡名	出土位置	長さ	幅	深さ	形状	出土遺物 分類・部位	備考	
F1	シケウ	64.0	41.0	22.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F62	ウケウ	40.0	34.0	20.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F2	シケウ	40.0	38.0	27.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F63	ウケウ	36.0	34.0	21.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F3	シコホ	42.0	46.0	11.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F64	ウケウ	37.0	34.0	24.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F4	シケホ	45.0	36.0	31.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F65	ウケウ+5	33.0	32.0	29.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F5	シケホ	27.0	19.0	48.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F66	シコホ	44.0	41.0	17.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F6	シケウ	36.0	28.0	17.0	楕円形	灰黒褐色土 (10194/2)	F67	シコホ	53.0	42.0	17.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)			
F7	シケウ	28.0	26.0	16.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F68	シコホ	32.0	24.0	25.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F8	シホ・タホ+9	34.0	28.0	28.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F69	シコホ+6	33.0	36.0	22.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)			
F9	シケホ	36.0	23.0	27.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F70	シコホ	44.0	44.0	18.0	11.0	不整形	黒褐色土 (10193/1)		
F10	シホ・ケウ	36.0	24.0	16.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F71	シコホ	36.0	32.0	29.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F11	シケホ	41.0	32.0	28.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F72	シコホ	35.0	32.0	16.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F12	シコホ	51.0	30.0	28.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F73	シケホ	46.0	49.0	41.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)			
F13	ウアホ	36.0	22.0	14.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F74	シケホ	48.0	43.0	13.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F14	シケホ	27.0	28.0	22.0	方形	土師器 内黒片 1片	F75	シケホ	70.0	32.0	32.0	不整形	黒褐色土 (10193/1)			
F15	シケホ	28.0	24.0	23.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F76	シケホ	34.0	24.0	16.0	方形	黒褐色土 (10193/1)			
F16	シケホ	35.0	26.0	29.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)	F77	シケホ	26.0	26.0	37.0	方形	黒褐色土 (10193/1)			
F17	シケホ	50.0	48.0	17.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F78	シケホ	64.0	53.0	62.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F18	シホ	42.0	33.0	31.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)	F79	シコホ	29.0	28.0	36.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F19	シケホ	30.0	28.0	8.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F80	ウアホ	49.0	42.0	17.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F20	シコホ	34.0	32.0	19.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F81	ウアホ	49.0	40.0	24.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F21	シケホ	37.0	34.0	19.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F82	シコホ	50.0	39.0	14.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F22	シケウ	31.0	21.0	28.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)	F83	シコホ	45.0	42.0	30.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F23	ウカウ	41.0	36.0	20.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F84	シコホ	61.0	41.0	16.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)			
F24	ウカウ	22.0	22.0	17.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F85	シコホ	55.0	52.0	25.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F25	ウカウ	48.0	36.0	25.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F86	シコホ	27.0	23.0	14.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F26	ウカホ	91.0	70.0	41.0	楕円形	土師器内黒片 黒片 名残裏 1片	F87	シコホ	30.0	26.0	16.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F27	ウカホ	106.0	54.0	25.0	楕円形	土師器内黒片 5 黒片 名残裏 1片	F88	シケホ	45.0	30.0	15.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F28	ウカウ	26.0	22.0	14.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F89	シケホ	36.0	28.0	12.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F29	ウカホ	45.0	44.0	32.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F90	シケホ	48.0	43.0	27.0	-	黒褐色土 (10193/1)			
F30	ウカホ	45.0	29.0	36.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F91	シケホ	43.0	37.0	58.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F31	ウカホ	45.0	29.0	15.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F92	シケホ	28.0	28.0	8.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F32	ウカウ	52.0	27.0	11.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F93	ウアホ	23.0	21.0	13.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F33	シケウ	30.0	36.0	23.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)	F94	ウアホ	28.0	23.0	29.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F34	ウカホ	52.0	36.0	46.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F95	ウアホ	26.0	18.0	3.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)			
F35	ウケウ	23.0	22.0	31.0	方形	黒褐色土 (10193/2)	F96	ウアホ	42.0	30.0	17.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)			
F36	シケホ+7	47.0	38.0	33.0	不整形	黒褐色土 (10193/1)	F97	ウアホ	36.0	28.0	16.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)		礎より古	
F37	ウカホ	-	-	47.0	-	黒褐色土 (10193/2)	F98	ウアホ	36.0	35.0	18.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F38	ウカホ	-	-	54.0	-	黒褐色土 (10193/2)	F99	ウアホ	30.0	43.0	43.0	-	礎より古			
F39	ウカホ	-	-	43.0	-	黒褐色土 (10193/2)	F100	ウアホ	26.0	24.0	17.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F40	ウカホ	33.0	25.0	46.0	不整形	黒褐色土 (10193/2)	F101	ウアホ	30.0	28.0	24.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F41	ウカホ	38.0	33.0	28.0	円形	黒色土 (10192/1)	F102	ウアホ	40.0	33.0	33.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F42	ウカホ	36.0	38.0	25.0	円形	黒色土 (10192/1)	F103	ウアホ	40.0	42.0	28.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F43	ウカホ	49.0	36.0	34.0	楕円形	黒色土 (10192/1)	F104	ウアホ+5	63.0	38.0	19.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)			
F44	ウカホ	40.0	22.0	49.0	楕円形	黒色土 (10192/1)	F105	ウアホ	32.0	28.0	25.0	円形	黒褐色土 (10193/1)			
F45	ウカホ	46.0	34.0	23.0	円形	黒色土 (10192/1)	F106	ウアホ+8	81.0	60.0	22.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)			
F46	シケウ+2	69.0	36.0	31.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)	F107	ウアホ	40.0	35.0	32.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F47	シケウ	43.0	43.0	44.0	方形	黒褐色土 (10193/1)	F108	ウアホ	52.0	41.0	23.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)			
F48	シコウ	73.0	43.0	21.0	不整形	黒褐色土 (10193/1)	F109	ウアホ+1	33.0	27.0	20.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F49	ウカホ	44.0	40.0	32.0	楕円形	黒色土 (10192/1)	F110	ウアホ+7	34.0	27.0	17.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F50	ウカホ	41.0	40.0	47.0	円形	黒色土 (10192/1)	F111	ウアホ	36.0	28.0	48.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)			
F51	ウカホ	54.0	53.0	12.0	円形	黒褐色土 (10192/1)	F112	ウアホ	69.0	36.0	20.0	不整形	黒褐色土 (10193/2)			
F52	ウアホ+7	56.0	33.0	16.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)	F113	ウアホ	-	-	23.0	-	黒褐色土 (10193/2)			
F53	ウアホ	50.0	28.0	18.0	不整形	黒褐色土 (10193/1)	F114	ウアホ	72.0	50.0	21.0	不整形	黒褐色土 (10193/2)			
F54	ウアホ	38.0	30.0	19.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F115	ウアホ+4	50.0	31.0	21.0	不整形	黒褐色土 (10193/2)			
F55	ウアホ	52.0	41.0	16.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F116	ウアホ	29.0	24.0	37.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)			
F56	ウアホ	37.0	30.0	22.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F117	ウアホ	41.0	46.0	32.0	不整形	黒褐色土 (10193/2)			
F57	ウアホ+6	64.0	51.0	42.0	楕円形	黒褐色土 (10193/1)	F118	ウアホ+6	44.0	39.0	23.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F58	ウアホ	42.0	27.0	24.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F119	ウアホ	33.0	30.0	18.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			
F59	ウアホ	54.0	48.0	46.0	円形	黒褐色土 (10193/2)	F120	ウアホ	42.0	29.0	12.0	楕円形	黒褐色土 (10193/2)			
F60	ウアホ	13.0	14.0	22.0	円形	黒褐色土 (10193/1)	F121	ウアホ	28.0	24.0	17.0	円形	黒褐色土 (10193/2)			

第V章 調査のまとめ

今回、発掘調査が行われた野馬窪遺跡Ⅶの周辺は、過去に数次の発掘調査がおこなわれ地点別の遺跡状況が把握されている場所がある。また、各種の開発に先立ち試掘・確認調査がおこなわれ、所産時期までは確定できないが遺構の広がりを確認している部分もある。本章ではこれらの成果も含め(第26図参照)今回の調査地点の成果をまとめてみたい。

周辺部で行われた発掘調査で規模の大きな箇所は2か所である。まず、平成20年度に行われた野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲで7000㎡が調査されている。検出された遺構は9世紀後半の堅穴住居1棟、中世の堅穴建物址17棟、掘立柱建物址13棟、土坑234基、溝址17条である。報告者は遺跡の性格を、2重の方形?区画溝に囲まれた館が12世紀後半に創建され、13世紀末に廃絶され、14世紀代には一般の居住域となるが、掘立柱建物址と堅穴建物址が重複しないことから、館的な様相も残しているとまとめている。これに対して、野馬窪遺跡Ⅳは平成24・25年度に、7468㎡の発掘調査が行われた。検出された遺構は古墳時代から平安時代の堅穴住居址27軒、掘立柱建物址2棟、土坑13基、溝状遺構8条等である。Ⅳ地点の調査では中世と考えられる遺構はほとんど検出されず、古代集落址の一部と考えられる住居址群が調査された。これを裏付けるように、Ⅳ地区に接する台地西側縁の試掘・確認調査では28軒以上の堅穴住居址が確認されている。今回の調査地点もこれら集落範囲に含まれると考えられる。

このように、この台地は場所により時代毎の使用目的が大きく異なる事が解る。台地西側縁にかけては主に平安時代の集落の一部として使用され、不確定ではあるが一時期20軒以上の住居が台地縁に沿って300m以上の広さで展開していたことが想像できる。また、台地内部は中世の館或いは集落として使用され、平安時代の集落は台地内部までは展開しない。これら時代による使用変化は、いかなる理由で起こるのであろうか。一つの考えとして「水」の問題がある。中世の館内には10か所の井戸(生活用水としての井戸かは確定していない)と考えられる土坑が発見されているが、平安時代の集落域には井戸的な遺構は見えていない。このことは、集落内の水利用形態に関して、時代により変化があることを示しているのではないだろうか。概略で示すと古代集落は河川や雨水利用。中世段階より井戸利用というものである。確かに、本地域では古代の集落を調査しても井戸の発見が少く、12世紀以降の遺跡になると井戸が多く検出されるように感じられる。今回は集成等の裏付けなく書きすめしたが、これが肯定されれば、佐久地域の特徴なのか或るは山間部という地域だからなのか。様々な問題も派生する。今後一考の必要がある課題と考える。

最後に、今回の調査でも検出された溝址の問題に触れたい。第26図で示したように周辺部には調査により何本かの溝址が検出されている。特徴的なのはⅡ・Ⅲ区で検出された2本のL字に屈曲する溝址である。この溝址が中世の館を構成する要素と考えられているが、周辺全体を巨視的にみると同じようにL字に屈曲する溝址があり、「一町四方」を想定できる部分もある。各溝址の同時性は検証しなければならないが、溝址の検出状況からⅣ区の中世館は所謂「方形館」として想定しにくい状況である。逆にいくつかのL字やコ字に囲まれたエリアが存在し、溝で囲まれた範囲は無遺構地帯であったりと様々な形態で利用されている様子がうかがえる。これらの溝址が中世の所産ということであれば、先に示した水利用の問題も含め、12世紀末～14世紀にかけてのこれら中世遺構群の性格や選地理由も明らかになっていくのではないだろうか。

以上、検証なしに書き進めたが、調査のまとめとして触れた先の二つの点は、まとめというより課題であり、今後の周辺部での調査事例の追加をまって検証していかなければならない問題であろう。以上雑駁なまとめとなったが、発掘調査で明らかにされる遺跡の広がりはおく限られた範囲であることに改めて気づかされた調査となった。



調査区周辺航空写真(東洋航空事業株式会社撮影 1972年)



野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ(株式会社こうそく撮影 平成6年)



調査区近景(西より 表土掘削・遺構確認状況)



H1号住居址(南より)



H1号住居址掘方(南より)



H1号住居址カマド(南より)



H1号住居址カマド掘方



H1号住居址覆土堆積状況(東より)



H1号住居址遺物出土状況(西より)



H2号住居址全景(南より)



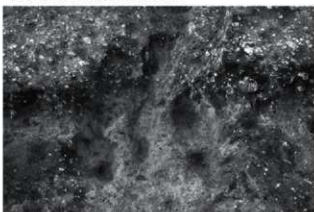
H2号住居址掘方



H2号住居址覆土堆積状況



H2号住居址カメラド



H2号住居址カメラド掘方



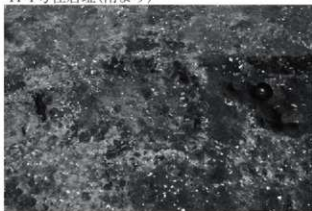
H3号住居址(南より)



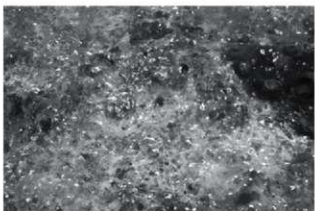
H3号住居址覆土堆積土状況



H4号住居址(南より)



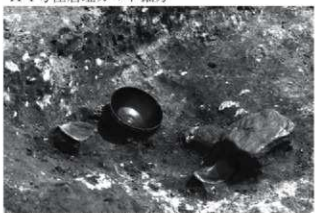
H4号住居址カマド(南より)



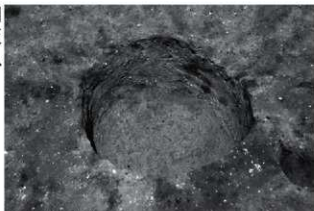
H4号住居址カマド掘方



H4号住居址掘方



H4号住居址遺物出土状況(西より)



D 1号土坑全景



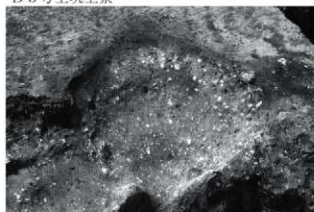
D 2号土坑全景



D 3号土坑全景



D 4号土坑全景(東より)



D 5号土坑全景(東より)



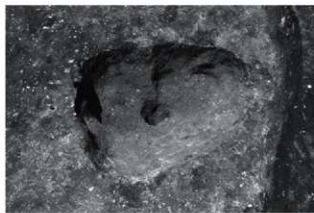
D 6号土坑全景(南より)



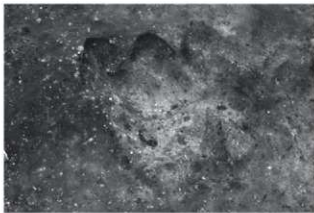
D 7号土坑全景(西より)



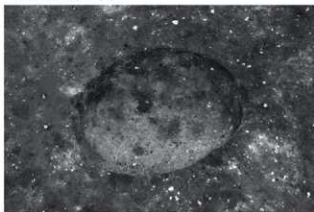
D 8号土坑全景(北より)



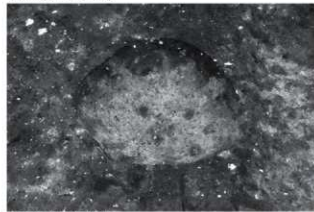
D 9号土坑全景



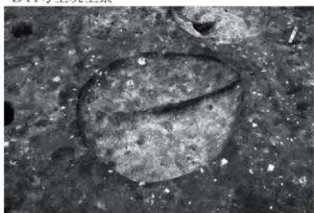
D10号土坑全景



D11号土坑全景



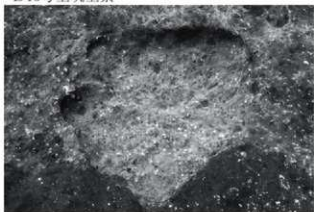
D12号土坑全景



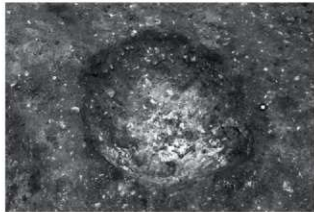
D13号土坑全景



D14号土坑全景



D15号土坑全景



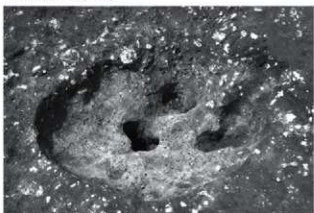
D16号土坑全景



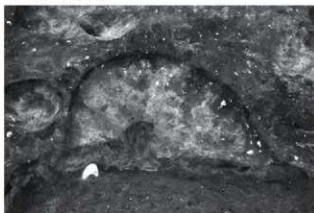
D17号土坑全景



D18号土坑全景



D19号土坑全景



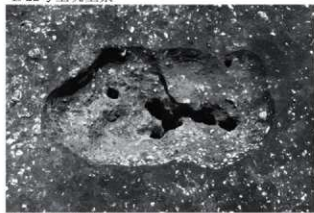
D21号土坑全景



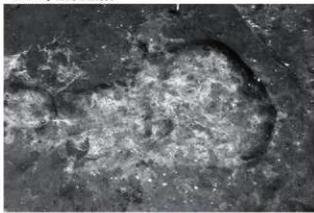
D22号土坑全景



D23号土坑全景



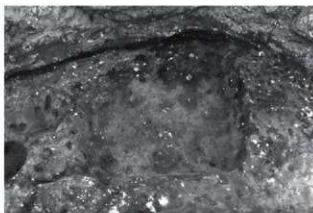
D24号土坑全景



D25号土坑全景



D26号土坑全景



D27号土坑全景

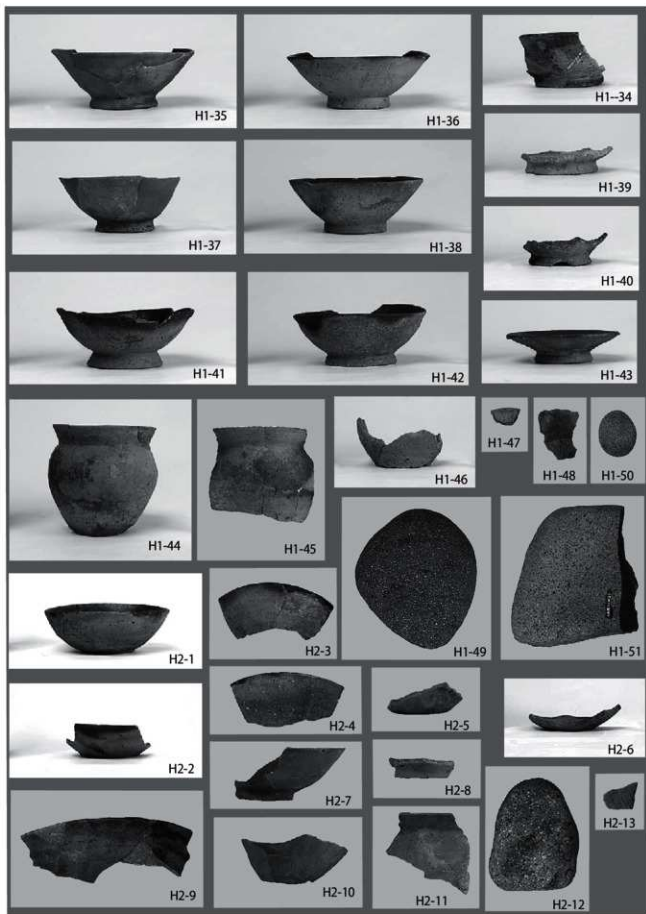


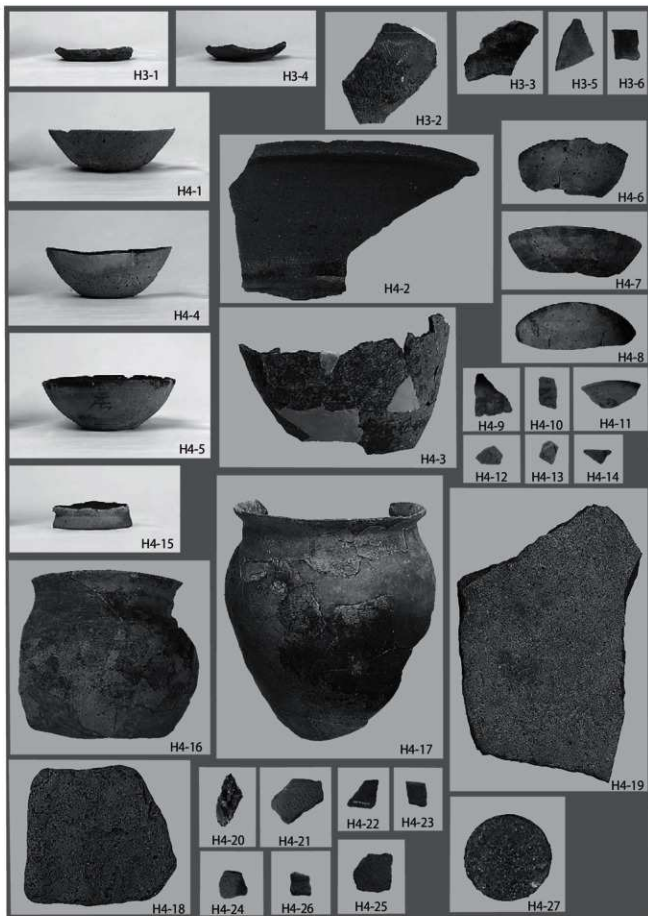
M1号溝状遺構(南より)

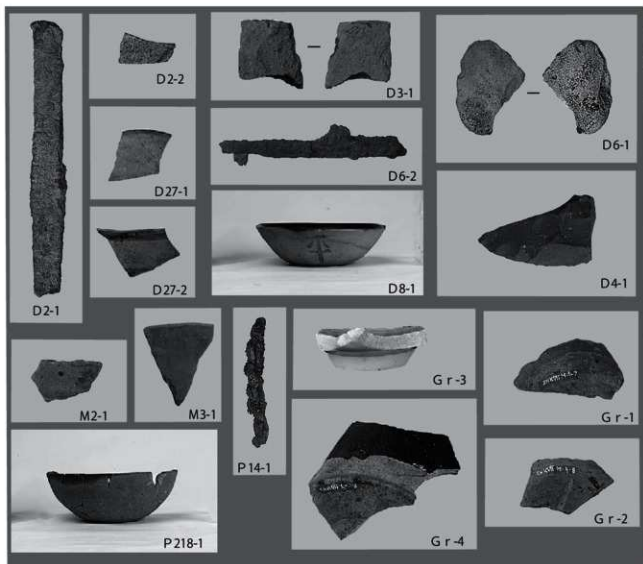


M3号溝状遺構(東より)









調査区全景(北より 遠方に立科・八ヶ岳連峰を望む)

報告書抄録

ふりがな	のまくぼいせきぐん のまくぼいせきなな		
書名	野馬窪遺跡群 野馬窪遺跡Ⅶ		
副書名			
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第 259 集		
編著者名	富沢 一明		
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課		
所在地	長野県佐久市中込 2913 TEL 0267-63-5321 FAX0267-63-5322		
発行年月日	平成 31 年 (2019) 2 月		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
のまくぼいせきぐん のまくぼいせきなな 野馬窪遺跡群 野馬窪遺跡Ⅶ	さくしさるくぼ 佐久市猿久保 165-1 他	20217	122	36° 15.36	138° 29.05	20180507 ～ 20180629	1543	長野県立 武道館 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野馬窪遺跡群 野馬窪遺跡Ⅶ	集落址	平安	住居址 4軒 土坑 27基 溝状遺構 3本	灰軸陶器・土師器・ 須恵器・石器・鉄製品	

要 約	台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に平安時代の竪穴住居址が検出された。中でもH1号住居跡からは、墨書土器やいわゆる「伊勢甕」と呼ばれる甕片が出土した。しかし、近隣の遺跡から検出されている中世関連の遺構は発見されなかった。
-----	--

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 259 集

野馬窪遺跡群 野馬窪遺跡Ⅶ

平成 31 年 (2019) 2 月

編集・発行 佐久市教育委員会

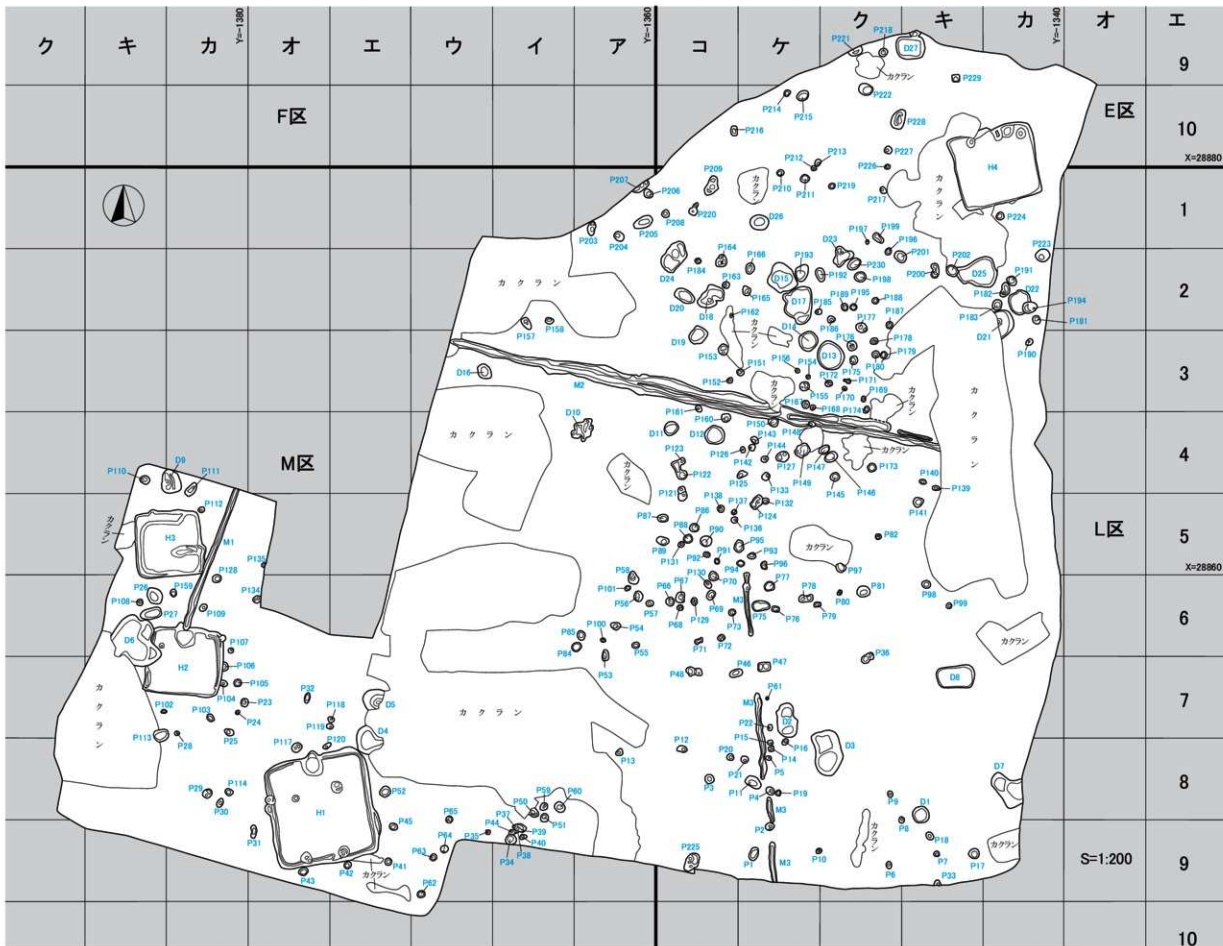
〒 385-8501 長野県佐久市中込 3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

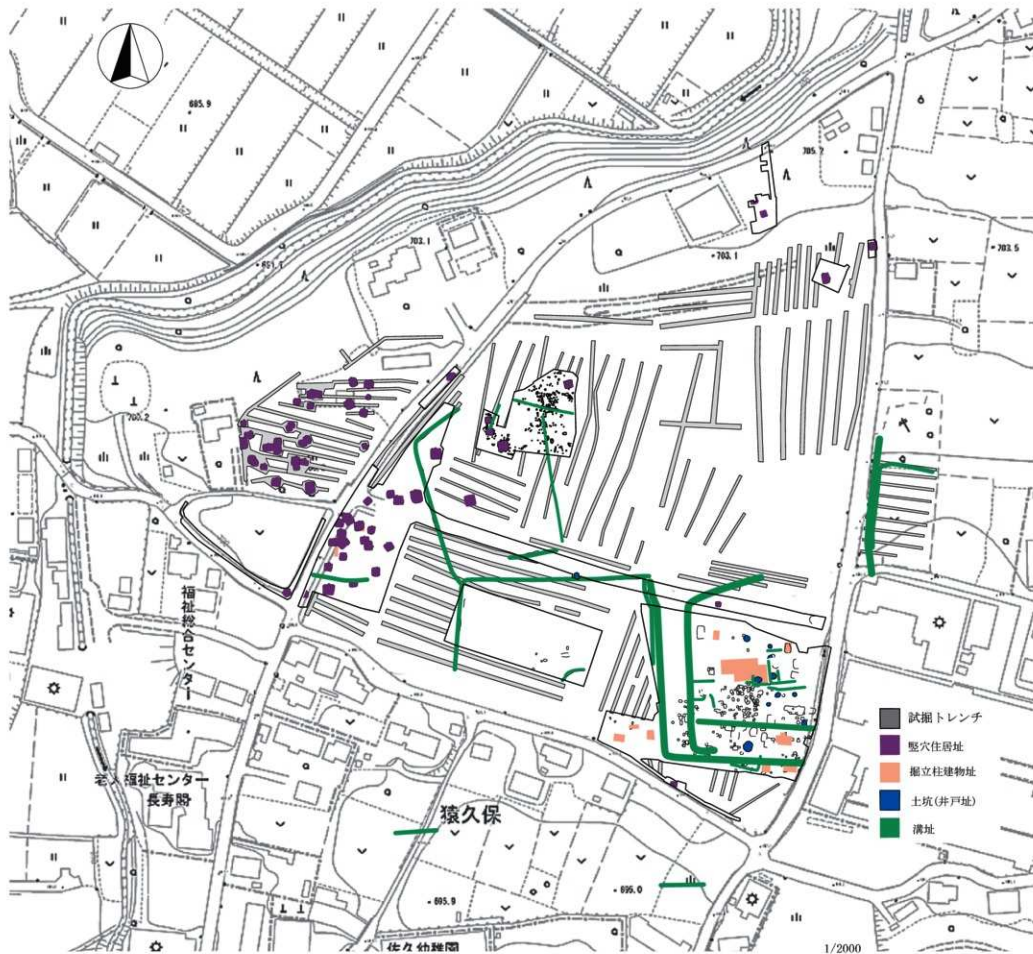
〒 385-0051 長野県佐久市中込 2913

TEL 0267-63-5321

印刷所 双葉印刷



第5図 野馬骨遺跡Ⅶ調査全体図



第26図 野馬窪遺跡Ⅶ発掘調査図